兵庫県文化財調査報告　第469冊

南あわじ市

鐘　原　遺　跡

―広域営農団地農道整備事業南淡路地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成26(2014)年3月

兵庫県教育委員会

鐘原遺跡

兵庫県文化財調査報告　第469冊

兵庫県教育委員会

25教Ⓣ1-023A4

南あわじ市

鐘　原　遺　跡

―広域営農団地農道整備事業南淡路地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成 26(2014)年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

例　　言

1　本書は、兵庫県南あわじ市神代国衙に所在する鐘原遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は、広域営農団地農道整備事業　南淡路地区に伴うもので、兵庫県洲本土地改良事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。

3　調査の推移

（発掘作業）

確認調査　　平成22年10月27日

実施機関：兵庫県立考古博物館

本発掘調査　平成22年10月27日

実施機関：兵庫県立考古博物館

工事請負：有限会社清水設備

（出土品整理作業）

平成25年６月20日～平成26年３月31日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

4　本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　長濱誠司が担当した。

5　座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第Ⅴ系に属する。本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。

6　本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

本　文　目　次

第１章　調査の経過
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の経過 …… 3
　第３節　出土品整理作業の経過と体制 …… 4

第２章　遺跡をとりまく環境
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　調査の結果
　第１節　調査区の地形と基本層序 …… 8
　第２節　遺構 …… 8
　第３節　出土遺物 …… 12

第４章　自然科学分析
　鐘原遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定） …… 14

第５章　まとめ …… 17

報告書抄録 …… 18

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置 …… iii
第２図　調査区の位置（１） …… 1
第３図　調査区の位置（２） …… 2
第４図　三原平野の遺跡 …… 7
第５図　調査区周辺微地形復元図 …… 8
第６図　暦年較正年代グラフ（参考） …… 16

表　目　次

第１表　放射性炭素年代測定結果（１） …… 15
第２表　放射性炭素年代測定結果（２） …… 16

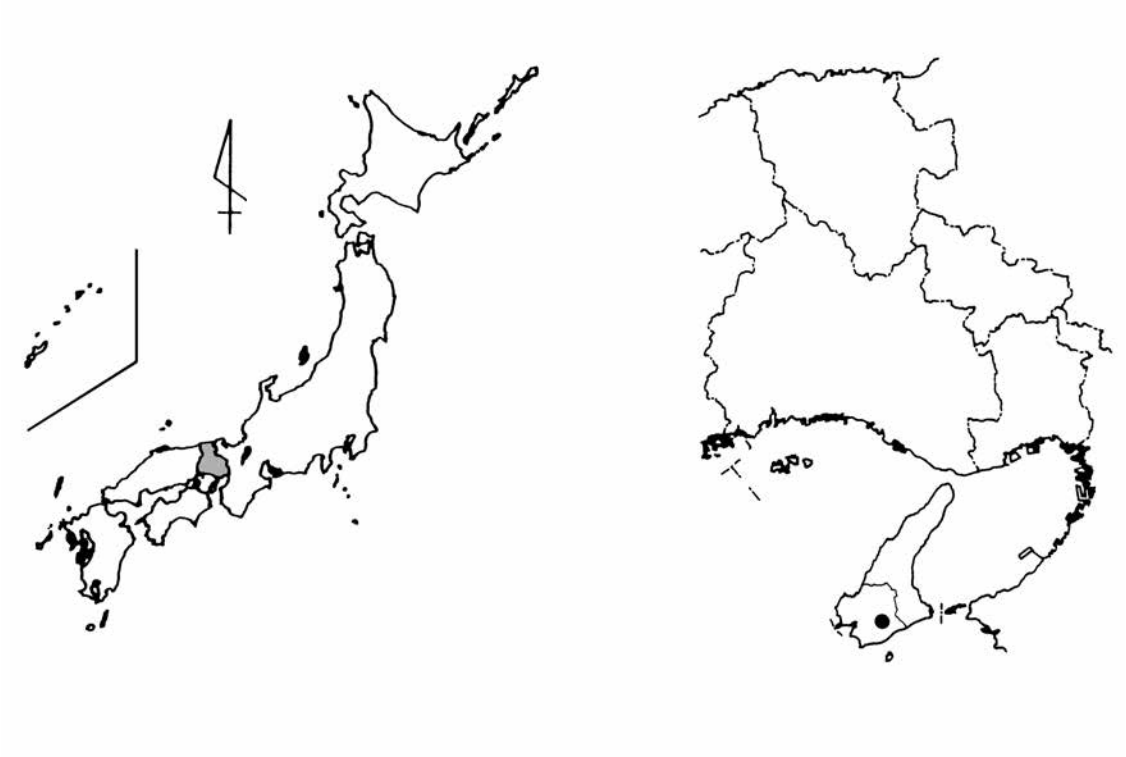
図　版　目　次

図版１　調査区全体図
図版２　１・２区

図版３　２区遺構（１）
図版４　２区遺構（２）
図版５　３・４区全体図
図版６　３・４区調査区断面図
図版７　３・４区遺構（１）
図版８　３・４区遺構（２）
図版９　３・４区遺構（３）
図版10　３・４区遺構（４）
図版11　出土遺物（１）
図版12　出土遺物（２）

写真図版目次

写真図版１　遺跡　調査区付近航空写真
写真図版２　遺跡　三原平野と遺跡　遺跡遠景（１）
写真図版３　遺跡　遺跡遠景（２）　遺跡遠景（３）
写真図版４　遺跡　調査対象地遠景　調査区調査前の状況
写真図版５　遺跡　調査区遠景（１）　調査区遠景（２）
写真図版６　遺構　調査区と周辺の地形（垂直写真）
写真図版７　遺構　調査区全景（１）（垂直写真）
写真図版８　遺構　調査区全景（２）　調査区全景（３）
写真図版９　遺構　１区と周辺の地形　１区全景　１区ＳＤ101
写真図版10　遺構　２区全景（１）　２区全景（２）　２区ＳＫ201～203
写真図版11　遺構　２区ＳＫ201・ＳＤ201　２区ＳＫ201・ＳＤ201断面　２区ＳＫ202・ＳＫ203
写真図版12　遺構　３・４区全景（１）　３・４区全景（２）　３区南半部西壁断面
写真図版13　遺構　３区北半部西壁断面　４区西壁断面　３区ＳＨ301・302
写真図版14　遺構　３区ＳＨ301　３区ＳＨ301断面　３区ＳＨ301壁際土坑断面
写真図版15　遺構　３区ＳＨ301屋内土坑断面　３区ＳＨ302　３区ＳＨ302断面
写真図版16　遺構　３区ＳＨ302壁際土坑断面　３区ＳＨ303　３区ＳＨ303断面
写真図版17　遺構　４区ＳＨ401・402　４区ＳＨ401・402南北断面　４区ＳＨ401・402東西断面
写真図版18　遺構　４区ＳＨ401床面検出粘土塊　４区ＳＨ402　４区ＳＨ402壁際土坑断面
写真図版19　遺構　４区ＳＫ401　４区ＳＫ404断面　４区ＳＫ405断面
写真図版20　遺物　出土遺物（１）
写真図版21　遺物　出土遺物（２）
写真図版22　遺物　出土遺物（３）
写真図版23　遺物　出土遺物（４）
写真図版24　遺物　出土遺物（５）



第１図　遺跡の位置

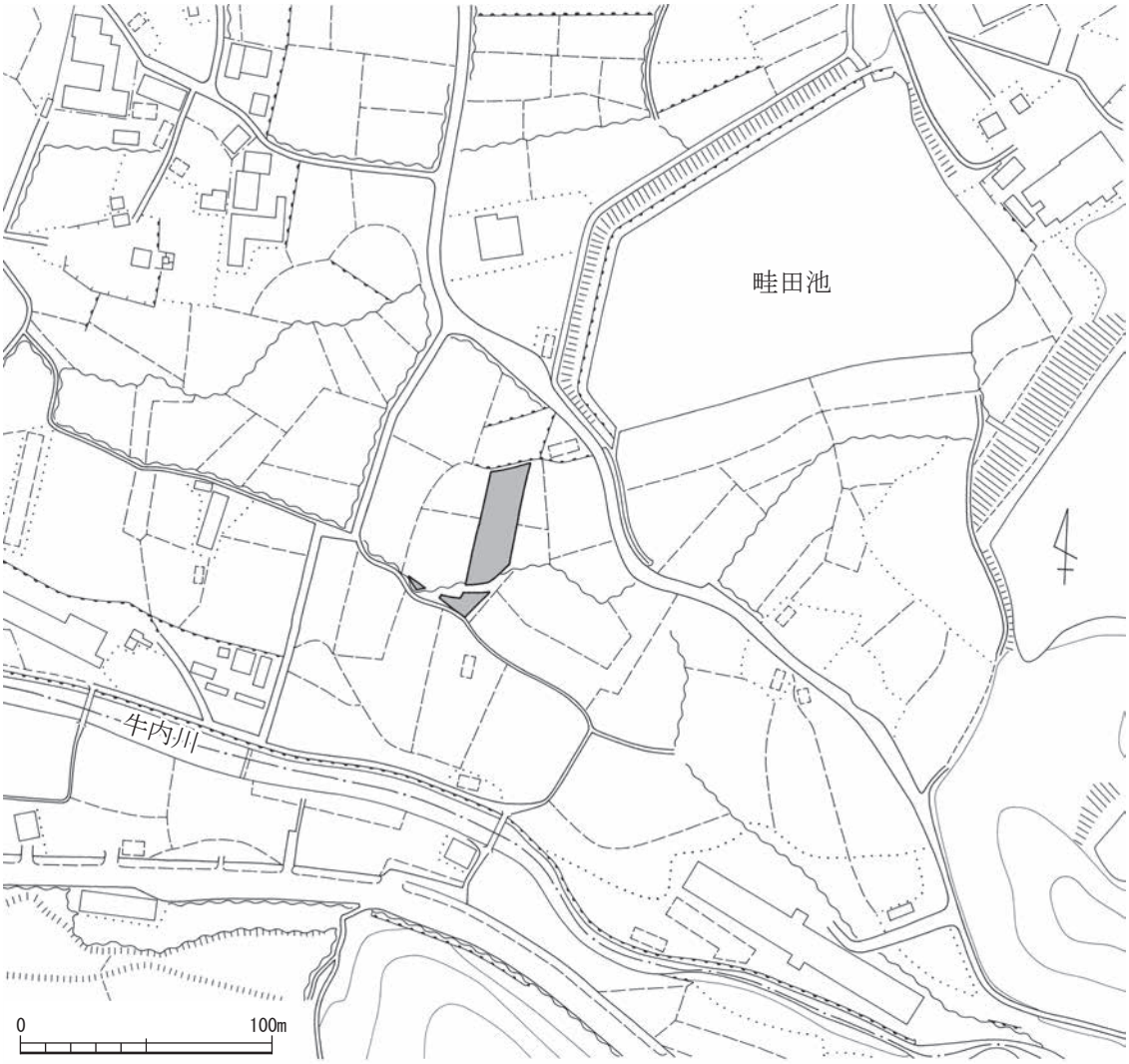
第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

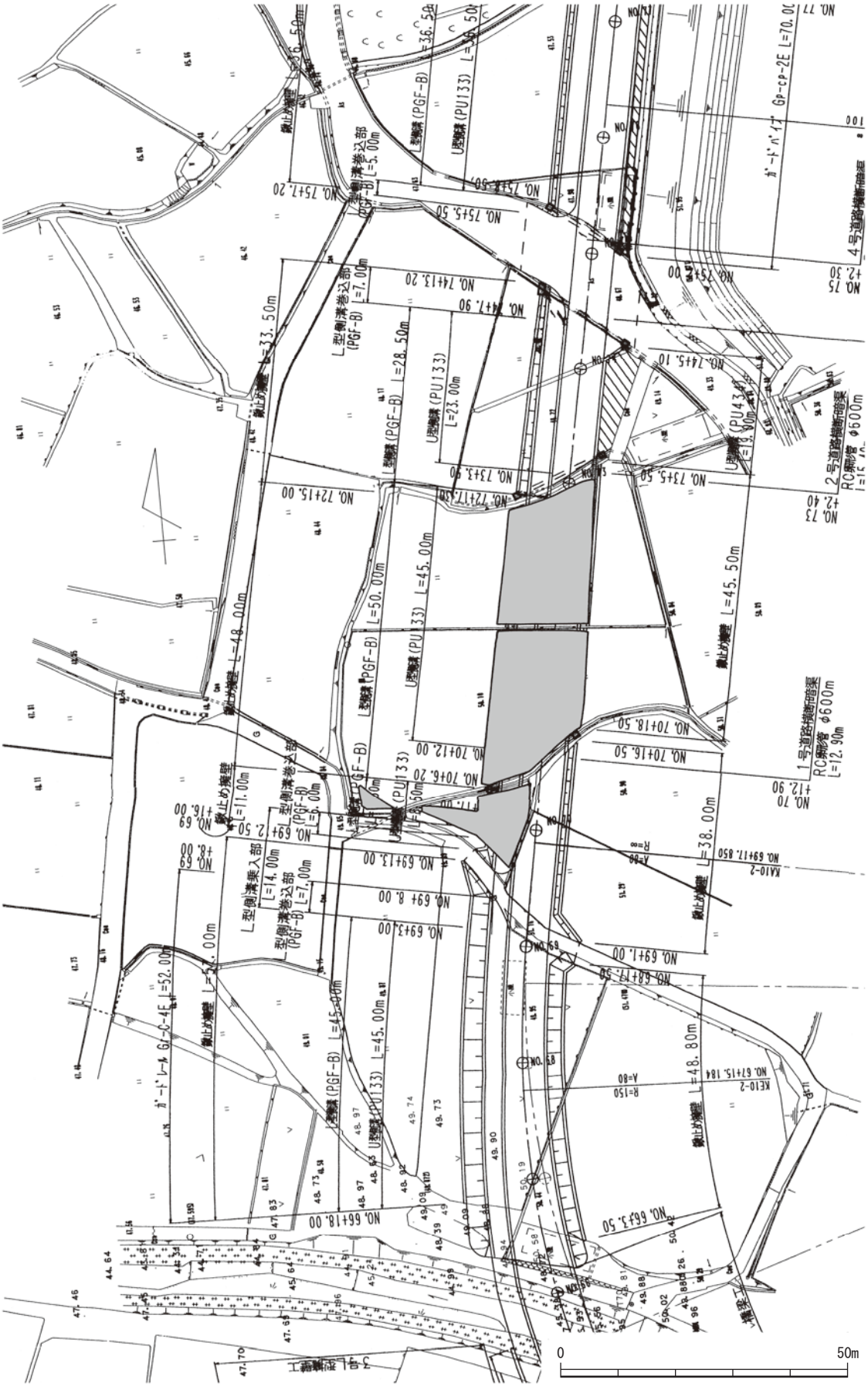
淡路島は温暖な気候に恵まれ県内有数の農業生産高をほこる農業王国である。島内唯一・最大の平野部である三原平野は酪農や稲作、レタス、タマネギを組み合わせ通年営農する。生産物は京阪神に出荷されるが、島内の幹線道路は交通量が多く渋滞が頻発している。また集落内や耕作地の道路は狭い。

洲本土地改良事務所が計画する広域営農団地農道整備事業南淡路地区は、淡路島南部の三原平野の農産物を効果的に搬送することを目的とした事業である。幹線道路の渋滞を緩和し南淡路地域の農産物の流通ルートを確保するとともに、農業の生産基盤と農村の生活環境の整備を目的とするものである。平成６年度より事業化され淡路島のブランド野菜であるタマネギの名を冠してオニオンロードの愛称をもつ。事業延長は南淡路市と洲本市を結ぶ19.6㎞である。

広域営農団地農道整備事業　南淡路地区に対する埋蔵文化財の対応は、平成８年度に計画路線を対象にした分布調査に始まる。ただし、その後の計画変更に対応し、事業者側と協議しつつ対象範囲の分布調査を随時行っている。遺物を採集した地点については、事業の進捗に応じて平成12年度より確認調査



第２図　調査区の位置（１）



第３図　調査区の位置（２）

を順次実施している。本発掘調査は平成15年度に珉平焼窯跡、平成16年度に汁谷窯跡・汁谷遺跡を行い、この２遺跡については出土品整理事業を経て発掘調査報告書を刊行している。

本報告の鐘原遺跡は、当初計画路線から外れていたため、平成８年度実施の分布調査の対象外であった。その後路線の計画変更があり、平成21年度に計画の変更が生じた箇所、新延伸箇所を対象とした分布調査を実施した。

第２節　発掘調査の経過

１．分布調査

遺物の散布などは確認できなかったが、事業地内に周知の埋蔵文化財包蔵地である鐘原遺跡が所在することを確認し、№４地点とした。

遺跡調査番号：2009200

調査年月日：平成21年７月29日

調査担当：県立考古博物館　企画調整課　山本　誠

２．確認調査

確認調査は事業が具体化した平成22年度に実施した。対象地内に２×２ｍのトレンチを７カ所設定して調査した。

調査の結果、対象地内の水田２筆について遺構が検出されるか、遺構面の広がりが確認できたため、本発掘調査に移行することとなった。

遺跡調査番号：2010219

調査年月日：平成22年10月27日

調査担当：県立考古博物館　企画調整課　小川弦太

調査面積：28㎡

３．本発掘調査

遺跡調査番号：2011298

調査期間：平成24年１月６日～２月10日

調査担当：県立考古博物館　調査第２課　山上雅弘・長濱誠司

調整事務担当：県立考古博物館　企画調整課　小川弦太

発掘調査工事委託：有限会社清水設備

空中写真測量委託：株式会社ジャパックス

調査面積：800㎡

調査対象範囲は調査開始時点では未買収地であったが、洲本土地改良事務所が地権者より借地することで本発掘調査を行った。したがって対象地内にある畦畔や水路、擁壁などの構造物はそのまま残すことになった。また当初は本線と農道の取り付き箇所を調査対象としたが、その後農道の付け替え部分についても追加して調査区に含めた。その結果、調査は４地区に細分することになった。また周辺は農作物が植え付けられているため埃の飛散、関係車両の駐車や現場の出入りには注意を払った。

発生した残土は横置きとしたが、調査対象地である水田の原況復旧を前提としていたため、調査区および残土仮置き範囲の耕土を一旦除去し、耕土と残土が混じらないよう注意した。

機械掘削後、人力により掘削、遺構検出・掘削を経て個別遺構や調査区壁面などの実測をおこなった。完掘後に写真用足場から全景写真を撮影し、空中写真測量により調査区の図化を行った。

なお遺構などの実測については、調査員が行ったが、工事下請である有限会社松浦興業の補助を得た。

第３節　出土品整理作業の経過と体制

平成25年度に魚住分館にて水洗、ネーミング作業を行った後、県立考古博物館に出土遺物を搬入し、接合・補強から報告書刊行までの諸作業を単年度で行った。

公益財団法人　兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査課

整理保存課

保存処理担当：岡本一秀

工程管理：長濱誠司・深江英憲

非常勤嘱託員等

水洗、ネーミング

今村直子・小野潤子・藤尾裕子・松本恵梨子

接合・補強、復元

荻野麻衣・佐々木愛・菅生真理子・藤池かづさ・吉村あけみ・上田紗耶香

実測、図補正、トレース、写真整理、レイアウト

友久伸子・森本貴子・柏木明子

第２章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境

兵庫県淡路島は、周囲174㎞、総面積597㎢を有する。古代においては津名郡、三原郡の２郡からなり、三原郡に国府が置かれた。三原郡４町（緑町・三原町・西淡町・南淡町）は平成17年１月11日に合併し、人口54,763人、面積229㎢の南あわじ市となり、津名郡６町のうち５町（淡路町･北淡町･津名町･東浦町･一宮町）は平成17年４月１日に合併して淡路市へ、残る五色町も平成18年２月11日に洲本市と合併して、古代以来存続した津名・三原両郡は行政区画上の名称から姿を消した。

淡路島の地質は、花崗岩から構成される北部の津名山地と和泉左岸や頁岩から構成される南部の諭鶴羽山地に大別できる。諭鶴羽山地の北西側には三原川や大日川などの流域に低位段丘化した扇状地が広がっており、島内最大の平野部である三原平野が形成される。三原平野の南東半部は段丘化した扇状地が、北西半部には低平な沖積地が広がり、大日川・三原川・成相川などの河川が南東から北西方向に流れ、播磨灘に注ぐ。河川の水量は多くなく、農業用水や飲料水を確保するため各河川の上流部となる諭鶴羽山地にダムが築かれる。

第２節　歴史的環境

旧石器時代

浦壁遺跡、曽根遺跡があり、ナイフ形石器が採集されている。

縄文時代

南畑遺跡では多量のサヌカイト製石鏃、前期の爪形文土器が採集される。長原遺跡ではサヌカイト製有舌尖頭器が出土する。おのころ島遺跡では中期の船元・里木式、谷町筋遺跡では後期の縁帯文、叶堂遺跡・幡多遺跡では中期～後期の土器が出土している。神子曽遺跡では石器が採集されていたが、発掘調査により中期の土坑が検出される。住居跡は確認できなかったが、周辺に当該時期の集落が所在するものと考えられる。

弥生時代

雨流遺跡では前期の水田が検出される。嫁ケ渕遺跡では前期～中期初頭の住居跡を検出している。中期～後期にかけては本報告の鐘原遺跡・谷町筋遺跡・鈩田遺跡・志知川沖田南遺跡・幡多遺跡・喜来遺跡・護国寺東遺跡など諸河川の中上流域にも集落が展開する。

幡多遺跡では中期の方形周溝墓が検出された。神子曽遺跡では中期の周溝墓18基をはじめ木棺墓・土坑墓・土器棺墓が検出され、島内有数の規模を有している。汁谷遺跡では流路から中期の土器・石器が出土し、付近に集落が所在すると思われる。西山遺跡は平野西側の南辺寺山山頂に所在し、高地性集落と考えられる。淡路島は青銅器の出土が多く、三原平野付近では、幡多遺跡から大阪湾型銅戈が、瀬戸内海に面した西原遺跡から銅剣、松帆慶野所在の中の御堂遺跡から銅鐸が出土している。

古墳時代

古墳は平野の西から北の丘陵上や山裾に所在するが、その多くは後期に属するもので、前・中期まで

さかのぼる古墳は知られていない。徳野塚村古墳は埋葬施設を陶棺とする唯一の例である。

集落遺跡は、中期の雨流遺跡、後期の鈩田遺跡・谷町筋遺跡・平松遺跡・幡多遺跡・片山遺跡・おのころ島遺跡・辻ノ内遺跡がある。

汁谷窯跡は島内最古の窯跡であり古墳時代末から須恵器生産を開始する。

古代

淡路島は淡路１国であり、南海道に属していた。南海道は、島内は紀淡海峡に面した由良から鳴門海峡に面した福良へ通じており、島内の復元ルートは複数あるものの、三原平野を通過するのは確実であり、途中に設置された神本駅家は、幡多遺跡（野水地区）が推定地であり、大型建物が検出される。

戒壇寺跡は重弧文軒平瓦が採集され、津名郡所在の志筑廃寺と並ぶ淡路国で最古級の寺院と考えられる。三原平野には国分寺跡、国分尼寺跡がある。国分寺跡では創建期の瓦窯が検出されている。

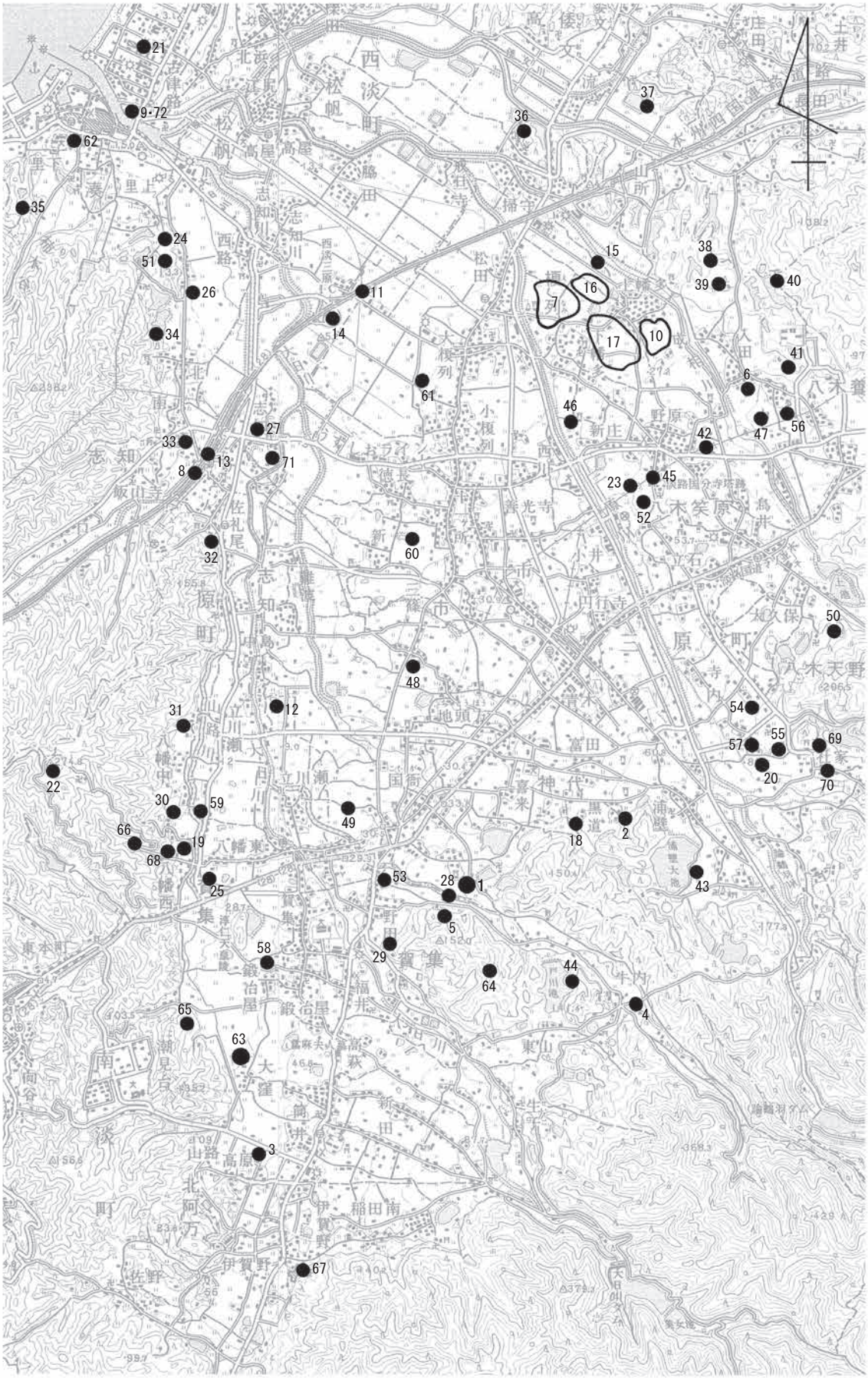
国府や三原郡衙の位置は明らかでないが、嫁ケ渕遺跡では大型建物が検出され、郡衙関連遺跡と考えられる。瓦の散布地として山惣廃寺、国衙廃寺がある。戸川池窯跡は８世紀に操業を開始する。

集落遺跡は片山遺跡・鈩田遺跡・幡多遺跡・石田遺跡・才門遺跡があり、建物跡などを検出している。

中世

この時期各地で開発が進み、集落が形成される。三原平野各地でこの時期の集落遺跡が確認されている。城館は養宜館跡を中心として小規模な防御施設を伴う城館が配置される。神子曽遺跡では鍛冶関連の遺物を埋蔵した土坑が検出される。

１．**鐘原遺跡**　２．汁谷窯跡・汁谷遺跡　３．曽根遺跡　４．長原遺跡　５．楠谷遺跡　６．南畑遺跡　７．おのころ島遺跡　８．谷町筋遺跡　９．叶堂遺跡　10．雨流遺跡　11．幡多遺跡（若宮地区）　12．嫁ケ渕遺跡　13．鈩田遺跡　14．志知川沖田南遺跡　15．幡多遺跡（下内田地区）　16．幡多遺跡（行当地地区）　17．幡多遺跡（野水地区）　18．喜来遺跡　19．護国寺東遺跡　20．海棠子遺跡　21．西原遺跡　22．西山遺跡　23．国分遺跡　24．後山遺跡　25．平松遺跡　26．片山遺跡　27．辻ノ内遺跡　28．小山古墳　29．野田山古墳　30．西山南古墳　31．西山北古墳　32．佐礼尾古墳群　33．ハバ古墳　34．庚申塚古墳　35．山の口古墳　36．掃守岡山寺古墳群　37．倭文委文古墳　38．長田山古墳群　39．宮田古墳　40．由ケ谷古墳　41．上八木古墳　42．徳野塚村古墳　43．浦壁池遺跡　44．戸川池窯跡　45．国分寺跡　46．国分尼寺跡　47．戒壇寺跡　48．山惣廃寺跡　49．国衙廃寺跡　50．佐保谷瓦窯跡　51．大畑遺跡　52．桜ケ地遺跡　53．上久保遺跡　54．外かち遺跡　55．戒添遺跡　56．養宜遺跡　57．上田土居城跡　58．賀集城の腰城跡　59．西山南殿土井館跡　60．階出屋敷館跡　61．高木城跡　62．湊城跡　63．神子曽遺跡　64．丹生山城跡　65．古城山城跡　66．城が丸城跡　67．珉平焼窯跡　68．護国寺跡　69．覚住寺跡　70．唐草遺跡　71．志知城跡　72．叶堂城跡


21
9・72
62
35
24
51
26
34
11
14
7
16
17
10
15
36
37
38
39
40
41
6
56
47
42
46
61
27
33
13
8
71
23
45
52
60
32
50
48
12
31
54
55
57
69
20
70
22
30
59
49
66
19
68
18
2
43
25
53
28
1
5
29
58
64
44
4
65
63
3
67

第４図　三原平野の遺跡

第３章　調査の結果

第１節　調査区の地形と基本層序

鐘原遺跡は淡路島南部を東西にのびる諭鶴羽山地から北に派生した山塊の西麓付近に位置する。調査区付近の現況は水田であり、海抜50m前後を測る。南東から北西方向に幅50～80mの尾根がのび、北側へは緩やかな傾斜をもつ。調査区の西および北側は海抜49m付近で１m以上の段差があり、この段差が遺跡の範囲の境界となる。南側は西流する牛内川へ向かって傾斜していく。

調査区のうち、尾根の頂部にあたる１・２区および３区南半部は現耕土直下が遺構面となるが、検出した遺構は多くない。これは遺構面が一帯の水田化に伴い削平が進んだことにより、深い遺構以外は消滅したためと考えている。

３区南半部も耕土直下で礫混じりの基盤層となり、この部分で検出した遺構は少ない。３区北半部から４区にかけては北側へ傾斜し、複数面の旧水田層の下に黒褐色を呈する礫混じりのシルト質細砂～極細砂層が堆積する。この層内には礫に混じって弥生土器などの遺物を多量に包含している。

第２節　遺構

１．柱穴

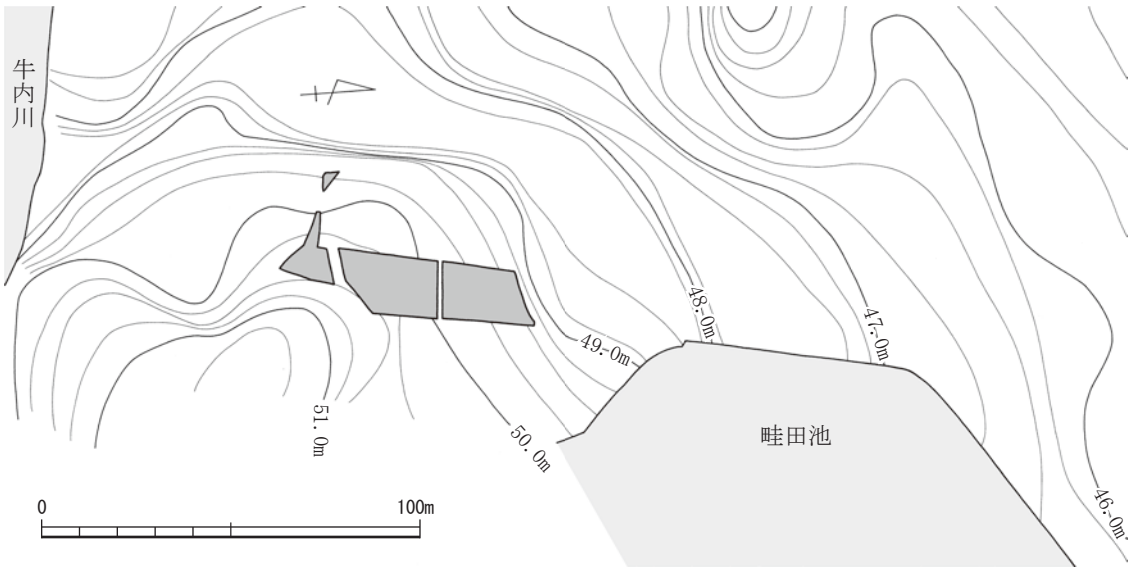
３区北半部から４区にかけて分布するが、掘立柱建物は復元できない。大半が弥生時代に属するものであるが、一部中世のものが混在する。柱穴内より弥生土器、須恵器などが出土している。

２．竪穴住居

ＳＨ301（図版７　写真図版13～15）

検出状況　３区中央付近で検出した。ＳＨ302が西側に隣接するが、重複しない。遺構は良好に残存するが、水田に伴う水路と重複し、埋土が撹乱される。

形状・規模　平面はほぼ方形を呈し、北西-南東方向に5.4m、北東-南西方向に6.6mを測る。検出面から床面までの深さは10㎝程度である。



第５図　調査区周辺微地形復元図

埋土　水路と重複しており、住居本来の埋土は下層部分のみ残存する。褐灰シルト質細砂である。

屋内施設　主柱穴は４本柱である。柱穴は直径30～40㎝、深さ10～20㎝程度である。また中央に焼土が混じる浅い楕円形の窪みが検出された。

周壁溝　各隅付近の壁際で断続的に検出したが北隅付近では検出せず全周はしない。壁際土坑の両側に接続する。

壁際土坑　南東側壁際の中央で検出した。平面形は不整な方形を呈する。規模は120㎝×80㎝を測り、床面からの深さは15㎝である。遺物は出土していない。

住居内土坑　床面北隅付近で検出した。平面形は北東 - 南西方向に主軸をもつ楕円形を呈し、長径90㎝、短径70㎝、深さ18㎝を測る。断面形は皿状を呈する。遺物は出土していない。

出土遺物　弥生土器鉢（４）などが出土した。

ＳＨ302（図版７　写真図版13・15・16）

検出状況　３区中央付近で検出した。ＳＨ301が東側に隣接するが、重複しない。遺構は良好に残存するが、一部水田に伴う水路と重複する。

形状・規模　平面はほぼ方形を呈し、北西－南東方向に5.4ｍ、北東－南西方向に5.4ｍを測る。検出面から床面までの深さは15㎝である。

埋土　基盤層がやや土壌化した層が堆積する。

屋内施設　主柱穴は４本柱である。柱穴は直径40～50㎝、深さ20～30㎝程度である。また中央に焼土が混じる浅い楕円形の窪みが検出された。

周壁溝　壁際を全周し、壁際土坑の両側に接続する。

壁際土坑　南東側壁際の中央で検出した。平面形は楕円形を呈する。規模は長径95㎝、短径70㎝を測り、床面からの深さは15㎝である。

出土遺物　弥生土器底部（５・６）が出土している。

ＳＨ303（図版８　写真図版16）

検出状況　３区北西隅壁際で検出した。調査区の制約により全容は明らかではないが、４区側では本遺構は検出していない。他の遺構との重複はみられない。

形状・規模　全容は不明であるが、壁が屈曲することから、方形を呈するものと考える。検出面から床面までの深さは10㎝である。

埋土　調査区を覆う黒褐色シルト質細砂～極細砂（遺物包含層）が堆積する。

屋内施設　床面では柱穴などの施設は検出していない。

出土遺物　弥生土器甕（７）、底部（８）が出土している。その他に弥生土器片が多く出土しているが、遺物包含層のものが混入している。

ＳＨ401（図版８　写真図版17・18）

検出状況　４区西壁際で検出した。調査区の制約により全容は不明であるが西側調査区外へ続いている。ＳＨ402と重複し、本遺構が埋没した後にＳＨ402が掘り込まれる。

形状・規模　平面形は円形を呈する。検出した部分から全容を復元すると径13ｍ程度となる。検出面から床面までの深さは10㎝である。

埋土　流入土により埋没する。本住居埋没後くぼみとなった所に遺物包含層が堆積している。

屋内施設　床面では複数の柱穴を検出したが主柱穴は抽出しえなかった。

周壁溝　検出部分については全周する。北半部では２重に周壁溝が巡ることから、本住居は少なくとも１度の拡張が行われたと考える。

出土遺物　埋土内より弥生土器片が出土しているが、切り合うＳＨ402や遺物包含層のものが混入する可能性がある。底部（10)、鉢底部（11)、広口壷（12)、壷口縁部（13・14)、器台の脚台部（15)、底部（16）を図化した。なお、南半部の周壁溝際で白色を呈する粘土塊を検出している。

ＳＨ402（図版８　写真図版18）

検出状況　４区西壁際で検出したが、遺構の大半は西側調査区外へ続いている。ＳＨ401と重複し、ＳＨ401埋没後に本住居が構築される。

形状・規模　平面は方形を呈するものと考える。南東辺は５ｍを測る。検出面から床面までの深さは50㎝である。

埋土　灰褐シルト質細砂が流れ込んだ後に調査区を覆う黒褐色シルト質細砂～極細砂（遺物包含層）により埋没する。

屋内施設　床面では壁際土坑を検出したのみである。周壁溝は検出した範囲では認められない。

壁際土坑　南東側壁際の中央で検出した。平面形は不整な方形を呈する。規模は１ｍ×１ｍを測り、床面からの深さは12㎝である。埋土には若干の炭粒が混じる程度である。

出土遺物　埋土内より土器片が出土しているが、遺物包含層のものが混入している。

３．土坑

ＳＫ201（図版３・４　写真図版10・11）

検出状況　ＳＤ201と重複し、本遺構が切られている。

形状・規模　東西方向に溝状にのびる。西半部では、断面は逆台形を呈し底部は平坦である。東半部は断面が皿状を呈し、肩部はやや不明瞭になる。底部はやや凹凸がある。

出土遺物　弥生土器などが出土するが、西半部の下層から須恵器片も出土する。このうち弥生土器底部（２）を図化した。

ＳＫ202（図版３・４　写真図版10・11）

検出状況　調査区西半部で検出した。南側にＳＫ203が接する。ＳＫ203とは切り合い関係にあり、本遺構がＳＫ203を切っている。検出したのは一部であり大半は北側調査区外へ続くが、検出位置からＳＫ201と同一となる可能性がある。

形状・規模　平面形は不明だが、肩部が直線的にのびることから、方形となる可能性がある。断面形は皿状を呈し、底部は平坦である。

埋土　ラミナ状の堆積をみせる。東半部では埋土に炭が混じる。

出土遺物　弥生土器底部（３）などが出土している。出土遺物の多くは摩滅する細片である。その他にサヌカイト片も出土した。

ＳＫ203（図版３・４　写真図版10・11）

検出状況　調査区西半部で検出した。南側調査区外へ続く。北側にＳＫ202、東側にＳＤ201が位置する。ＳＫ202とは切り合い関係にあり、ＳＫ202が本遺構を切っている。

形状・規模　断面形は逆台形を呈し、底部は比較的平坦である。

出土遺物　大半が弥生土器片だが、青磁片が１点出土する。

ＳＫ303（図版９）

検出状況　３区北東隅で検出した。東側は調査区外へ続いている。他の遺構との重複は認められないが、完掘後に底部で柱穴を検出している。

形状･規模　全容は明らかでないが、検出部分から平面形は方形を呈すると考える。検出長、幅ともに1.7ｍを測る。検出面からの深さは18㎝である。断面形は逆台形を呈すると思われるが、北側の肩部は不明瞭である。

埋土　砂礫が混じる。

出土遺物　図化すべき遺物は出土していない。

ＳＫ304（図版９）

検出状況　３区北半部で検出した。他の遺構との重複は認められない。

形状・規模　平面形は東西方向に主軸をもつ不整な長楕円形を呈し、長さ2.7ｍ、幅70㎝である。断面形はＵ字状を呈し、検出面からの深さは15㎝である。

埋土　明褐シルト質細砂の単層である。

出土遺物　図化すべき遺物は出土していない。

ＳＫ305（図版９）

検出状況　３区北半部で検出した。他の遺構との重複は認められない。

形状・規模　平面計は北東 - 南西方向に主軸をもつ楕円形を呈する。長さ１ｍ、幅80㎝を測る。断面形は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは10㎝である。

埋土　明褐灰細砂が堆積する。

出土遺物　図化すべき遺物は出土していない。

ＳＫ306（図版９）

検出状況　３区南半部で検出した。他の遺構との重複は認められない。

形状・規模　平面形は東西方向に主軸をもつ楕円形である。長さ1.1ｍ、幅80㎝を測る。断面形はすり鉢状を呈し、検出面からの深さは30㎝である。

埋土　褐灰細砂が堆積し、礫が混じる。

出土遺物　図化すべき遺物は出土していない。

ＳＫ401（図版10　写真図版19）

検出状況　４区南半部で検出した。周辺には柱穴などが分布するが、本遺構と重複するものはない。

形状・規模　平面形はほぼ南北方向に主軸をもつ楕円形を呈する。長径60㎝、短径40㎝、検出面からの深さ15㎝を測る。断面は逆台形を呈し、底部はやや凹凸がある。

埋土　褐灰シルト質細砂の単層である。

出土遺物　底部より土師器碗（31）、瓦質鍋（32）、庖丁（M1）が出土している。

ＳＫ404（図版10　写真図版19）

検出状況　４区南半部で検出した。周辺には柱穴などが分布しているが、断面観察では本遺構が埋没した後に柱穴が掘り込まれている。またＳＫ405とも重複し、本遺構が切られている。

形状・規模　平面形は南北方向に主軸をもつ不整な方形を呈する。長さ2.9ｍ、幅2.7ｍ、検出面からの深さ20㎝を測る。断面は皿状を呈し、底部はやや凹凸がある。

埋土　10㎝以下の礫が混じる。

出土遺物　埋土から弥生土器甕（21・22）、壷（23～25）、底部（26～29）などが多く出土している。

ＳＫ405（図版10　写真図版19）

検出状況　４区南半部、ＳＫ404の北西隅付近で検出した。ＳＫ404と重複し、本遺構が切っている。

形状・規模　平面形は不整な方形を呈し、東西方向に主軸をもつ。長さ、幅ともに0.8m、検出面からの深さ15㎝を測る。断面は逆台形を呈し、底部はやや凹凸がある。

埋土　自然堆積と考える。

出土遺物　図化すべき遺物は出土していない。

４．溝

ＳＤ101（図版２　写真図版９）

検出状況　１区南壁際で検出した。調査区の制約により北側の肩部を検出したのみであり、南側については明らかにしえない。

形状･規模　東西方向にのび、両側ともに調査区外へ続く。検出長5m、検出面からの深さは50㎝である。

埋土　褐灰シルト質細砂であり、部分的に地山がブロック状に混じる。底部には礫が混じった砂層が堆積し、流水があったものとみられる。

出土遺物　弥生土器片のほか、石鏃が底部付近から出土している。

ＳＤ402（図版10）

検出状況　４区北端付近で検出した。

形状・規模　東西方向にのび検出長２ｍを測る。両端ともに調査区内で完結する。幅45㎝、検出面からの深さ25㎝を測り、断面はＵ字状を呈する。

埋土　褐灰シルト質細砂の単層である。

出土遺物　図化すべき遺物は出土していない。

第３節　出土遺物

１．土器

２区出土土器

１～３は弥生土器底部である。１は平底の底部から体部へ直線的に開く。２・３は平底の底部がやや突出する。外面はタタキ調整を施す。

３区出土土器

４はＳＨ301から出土した弥生土器鉢で椀形の体部から口縁部が外反して開く。５・６はＳＨ302から出土した弥生土器底部である。５は平底の底部から内彎ぎみに立ち上がる。６は突出した底部である。７・８はＳＨ303から出土した。７は弥生土器甕である。く字状に屈曲する口縁部のみ残存する。端部は面をなす。８は突出した底部で、屈曲部は指押さえが認められる。９は包含層から出土した陶器椀の底部である。

４区出土土器

10～16はＳＨ401から出土した弥生土器であるが、切り合うＳＨ402や包含層のものが混入している可能性がある。10は平底の底部から体部へ直線的に開く。外面はタタキ調整を施す。11は鉢の底部とみられる。外面はタタキ調整を施す。12は広口壷である。直立する頸部から口縁部が外反し、端部は水平に

近い。下部に拡張し、凹線文を施す。13は壷口縁部である。端部はわずかに屈曲し直立する。14は二重口縁壷であろう。屈曲して斜上方に開く口縁部のみ残存し、端部は面をもつ。外面には円形浮文を施す。15は器台の脚台部であろうか。端部は突帯状に肥厚し外面に刺突文を２条施す。16は突出ぎみの底部である。外面にはタタキ調整を施す。

17～20は柱穴出土の弥生土器である。17はP401出土の底部である。外面はミガキ調整を施す。18はＰ405出土の壷口縁部である。端部を肥厚させ面をなし、浅い凹線文を施す。19はＰ426から出土した突出する平底の底部である。20はＰ447出土の底部である。外面はタタキ調整を施す。

21～29はＳＫ404から出土した弥生土器である。21・22は甕である。口縁部はく字状に屈曲して外反する。21は出土遺物の中で唯一全容が復元できた。復元高23.4㎝。体部外面はタタキ調整を施す。23～25は壷である。23・24は頸部から口縁部が短く外反する。25は口縁端部が垂下する。26～29は底部である。突出する平底で、27・28は屈曲部に指押さえを施す。

30はＰ425出土の須恵器甕である。肩部以下外面に横位の綾杉状タタキを施す。口縁部は突帯状に肥厚させる。31・32はＳＫ401から出土した。31は土師器杯である。平底の底部から屈曲して口縁部が直線的にのびる。32は瓦質鍋である。口縁部はＬ字状に屈曲し、端部が直立する。

33～36は包含層出土の弥生土器である。33・34は底部である。33は有孔鉢である。35・36は高坏脚部である。35は緩やかにハ字状に開く。杯部は底部のみ残存するが、皿状を呈するものとみられる。36は円柱状に長い脚柱部のみ残存する。中央付近に浅い凹線文を施す。

２．石器

Ｓ１は１区ＳＤ101から出土した凸基有茎石鏃未製品である。サヌカイト製で、肉眼観察では金山産とみられる。長さ2.82㎝、幅1.85㎝、厚さ5.4㎜、重さ2.8g。

３．金属器

すべて４区から出土した。Ｍ１はＳＫ401から出土したもので庖丁とみられる。残存長17.9㎝、刃部幅4.8㎝を測り両側に関がつく。茎部は断面形が長方形を呈し部分的に木質が残存する。

Ｍ２～Ｍ７は不明鉄製品である。このうちＭ６は包含層から、その他はＳＨ401埋土上層から出土した。ＳＨ401埋土上層出土のものについては、包含層出土のものが混入している可能性があり明確な時期は不明である。断面形は方形を呈するもの（Ｍ２。Ｍ４）と板状を呈するもの（Ｍ３・Ｍ５・Ｍ６・Ｍ７）がある。Ｍ２・Ｍ３は茎部を有し、両側に関をもつ。Ｍ２は鏃であろうか。Ｍ３は断面形が片刃状をなし、刀子の可能性もある。Ｍ４は断面方形で釘であろうか。Ｍ６は端部を折り返す。残存部分が弧状をなし、本来の形状は円形を呈するかもしれない。Ｍ７も一端を折り返している。

第４章　自然科学分析

鐘原遺跡における放射性炭素年代
（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

鐘原遺跡は、兵庫県南あわじ市神代国衙（北緯34°16′2″、東経134°45′55″）に所在し、牛内川右岸の段丘上に立地する。測定対象試料は、土坑 SK203から出土した木炭１点である（第１表）。

２　測定の意義

遺構の時期が不明であるため、年代測定によってその所属時期を明らかにする。

３　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（２）酸 - アルカリ - 酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から１M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１M に達した時には「AAA」、１M 未満の場合は「AaA」と第１表に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

４　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

（１）δ^{13}C は、試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第１表）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代はδ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。

補正した値を第１表に、補正していない値を参考値として第２表に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が100以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を第１表に、補正していない値を参考値として第２表に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C 補正を行い、下１桁を丸めない^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第２表に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６　測定結果

測定結果を第１・２表に示す。

試料 HY-10の^{14}C 年代は1730±20yrBP、暦年較正年代（1σ）は古墳時代前期頃に相当する（佐原2005）。

なお、この試料が含まれる１～３世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCal13に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある（尾嵜2009、坂本2010など）。その日本版較正曲線を用いてこの試料の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率は60％を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

第１表　放射性炭素年代測定結果（１）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-131134	HY-10	SK203　埋土上層	木炭	AAA	-27.71 ±0.40	1,730±20	80.66±0.24

［#6001］

第２表　放射性炭素年代測定結果（２）

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC（%）	(yrBP)		
IAAA-131134	1,770±20	80.22±0.23	1,726±24	256calAD - 299calAD (36.5%) 318calAD - 349calAD (25.6%) 369calAD - 378calAD (6.1%)	250calAD - 385calAD (95.4%)

［参考値］

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

尾嵜大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代 , 設楽博己 , 藤尾慎一郎 , 松木武彦編弥生時代の考古学1　弥生文化の輪郭 , 同成社 , 225-235

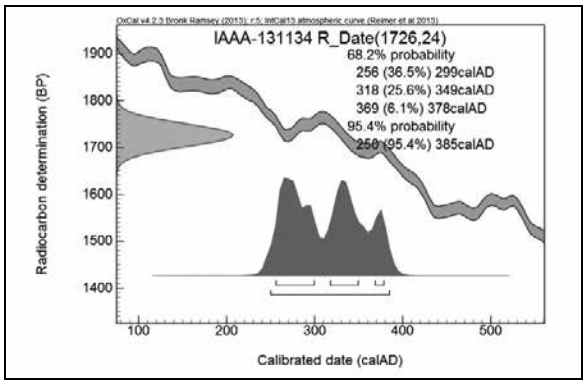
Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分 , 佐原眞 , ウェルナー・シュタインハウス監修 , 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集 , ドイツ展記念概説　日本の考古学　上巻 , 学生社 , 14-19

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木－弥生から古墳へ－ , 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集 ,（株）加速器分析研究所 , 85-90

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

第６図　暦年較正年代グラフ（参考）



第５章　まとめ

鐘原遺跡での発掘調査は今回が初めてである。調査では、竪穴住居跡５棟などの遺構が検出され、包含層からは弥生時代後期を中心とした遺物が出土している。

遺物の大半は摩滅したものであるが、これらは本調査区より高位から流入したと考えられることから、本調査区の東側一帯に弥生時代後期を主体とした集落が展開していることが想定され、本調査区はその西半部にあたると考える。

今回の調査で検出した竪穴住居跡は円形住居跡１棟、方形住居跡３棟、形態不明なもの１棟である。床面から良好な遺物の出土はなかったが、弥生時代後期の範疇のものと考える。

このうちＳＨ401は大半が調査区外であり、ＳＨ402と重複することから、屋内施設の配置など明らかにしがたいが、復元径は約13mを測る大型住居となる。このような大型円形住居としては、同じ三原平野に所在する木戸原遺跡（南あわじ市市三条）Ａ区検出の竪穴住居３がある。この住居は長径11.2m、短径10.7mを測り、同時期の円形住居跡が７ｍ程度であるのと比較すると卓越した規模であり、大型住居を中心に、周辺に数棟の住居が展開する集落景観がみられる。また、寺中遺跡（洲本市納）Ａ地区では５棟の住居が検出され、うち住居址Ａ－３は最大で径10.8mを測る。周囲には８ｍ前後の中規模の住居、５ｍ程度の小型住居が検出されている。大型円形住居は集落内に１棟のみ検出されていることから、集落１単位の中でも中心的な施設であると考えられる。

方形住居は、検出した３棟は全て同規模であり、集落内の標準的な住居と考えられる。いずれも地形の高位側となる南東壁際中央に壁際土坑をもつことが共通する。床面の中央には浅い炭の集積がみられるのに対し、壁際土坑は火を受けた痕跡はみられない。同様の施設をもつ住居としては、寺中遺跡Ａ区住居址Ａ－５がある。

大型円形住居を中心に周辺に中・小規模な住居数棟で構成される集落景観は淡路地区だけでなく兵庫県内各地域でも確認され、弥生時代後期の集落としては標準的な構成であり、本遺跡もまたその一例であろう。

なお、本遺跡東側に所在する汁谷遺跡（南あわじ市神代黒道）も段丘化した扇状地上に立地する遺跡であり、本遺跡の立地と共通する。集落本体は調査されていないが、流路などから弥生時代中期から後期の遺物がまとまって出土する。三原平野南端では河川を背後にひかえた扇状地上に弥生時代中期以降の集落が点在していることが予想される。

参考文献

「１木戸原遺跡－４・５次調査－」南あわじ市教育委員会『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅲ　2006年度埋蔵文化財調査』南あわじ市文化財調査報告書第３集　2010年３月

兵庫県教育委員会『寺中遺跡』兵庫県文化財調査報告第64冊　1989年３月

報告書抄録

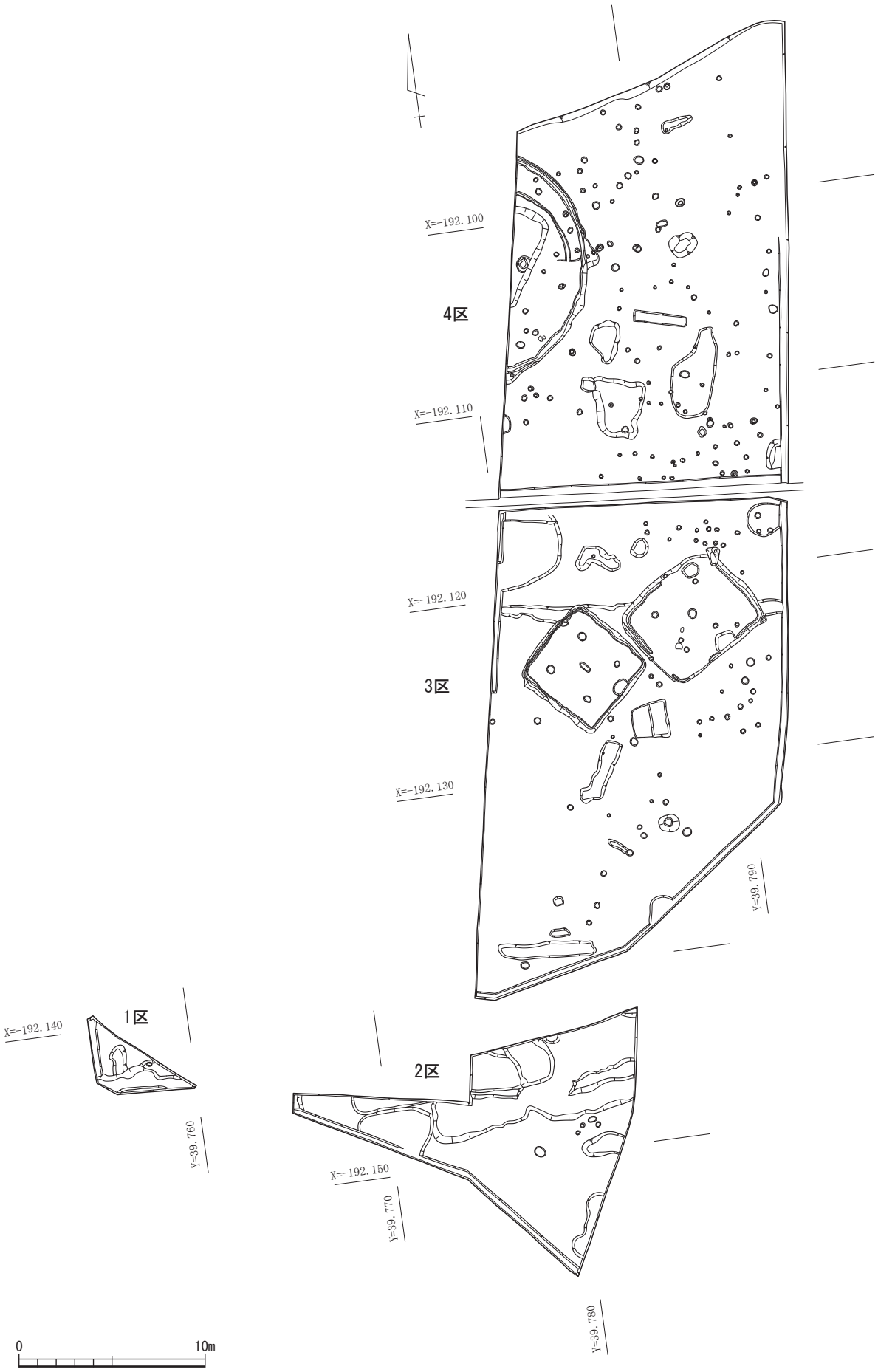
ふりがな	かねはらいせき
書　　名	鐘原遺跡
副　書　名	広域営農団地農道整備事業南淡路地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第469冊
編著者名	長濱 誠司
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所　在　地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号（兵庫県立考古博物館内）　TEL079－437－5561
発行機関	兵庫県教育委員会
所　在　地	〒650－8567　兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　TEL078－362－3784
発行年月日	平成26（20114）年3月31日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所　在　地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号　TEL079－437－5589

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間（遺跡調査番号）	調査面積（㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
鐘原遺跡	南あわじ市神代国衛地内	28224	950035	34°16′2″	134°45′55″	20120106～20120210（2011298）	800㎡	記録保存調査

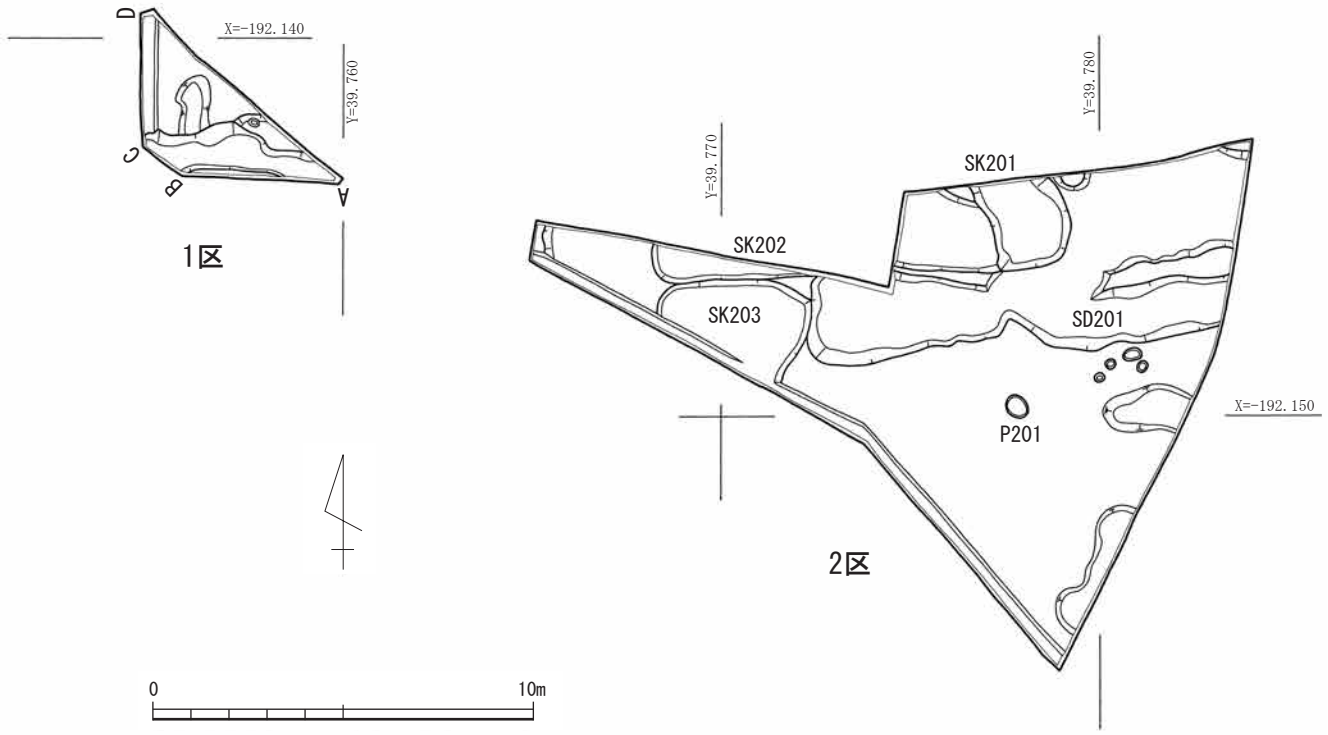
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鐘原遺跡	集落跡	弥生時代後期	竪穴住居跡・土坑	弥生土器・石器	大型の竪穴住居跡を検出
		中世	土坑・溝	土師器・鉄器	

要　約	三原平野南東端の扇状地上に所在する弥生時代後期を主体とした集落遺跡である。方形竪穴住居跡４棟、円形竪穴住居跡１棟を検出した。円形竪穴住居跡は一部を検出しただけだが、復元径約13mを測る大型のものであり、三原平野の同時期の集落にみられる中心的な施設であると考えられる。　遺物は遺物包含層を中心に弥生土器などが多量に出土した。その多くは破片であるが、調査区東側に集落が展開していることが想定される。出土遺物の量から、比較的規模の大きい集落であることが予想される。

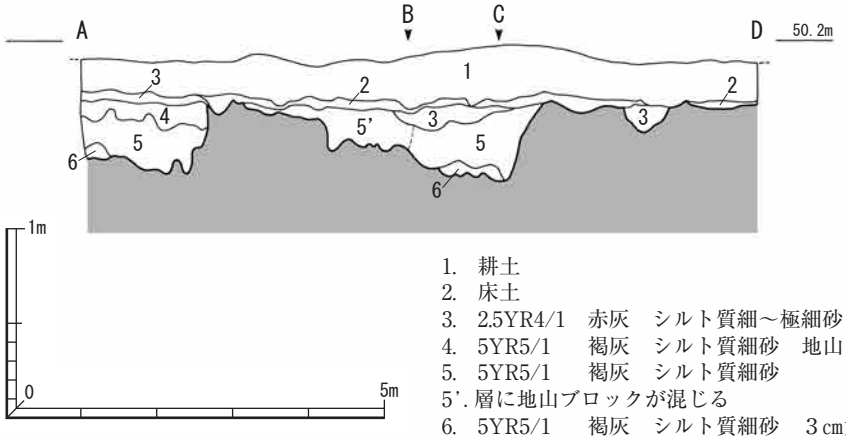
図　　版


X=-192.100
4区
X=-192.110
X=-192.120
3区
X=-192.130
Y=39.790
1区
X=-192.140
2区
Y=39.760
X=-192.150
Y=39.770
Y=39.780
0
10m

調査区全体図

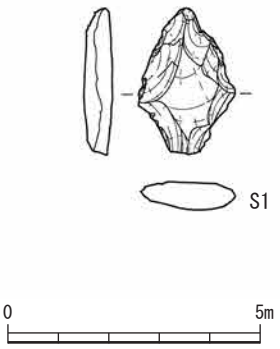


1区　調査区断面図

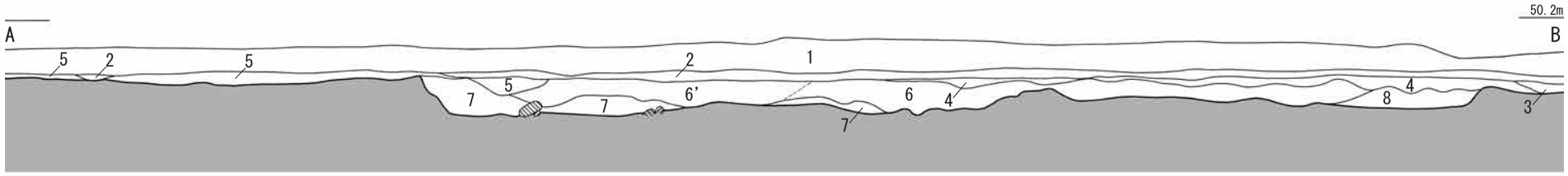


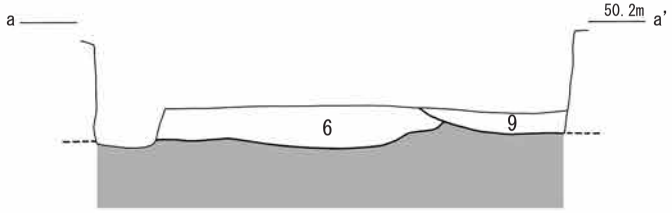
1. 耕土
2. 床土
3. 2.5YR4/1　赤灰　シルト質細～極細砂
4. 5YR5/1　　褐灰　シルト質細砂　地山ブロック混じる
5. 5YR5/1　　褐灰　シルト質細砂
5'. 層に地山ブロックが混じる
6. 5YR5/1　　褐灰　シルト質細砂　３cm大の礫混じる

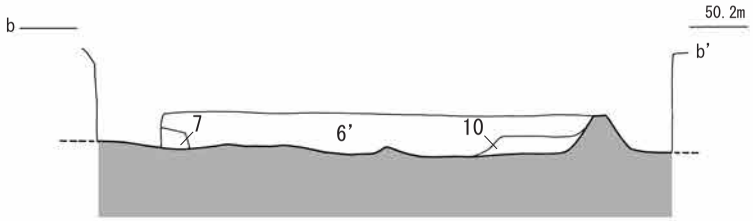
SD101

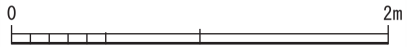


１・２区

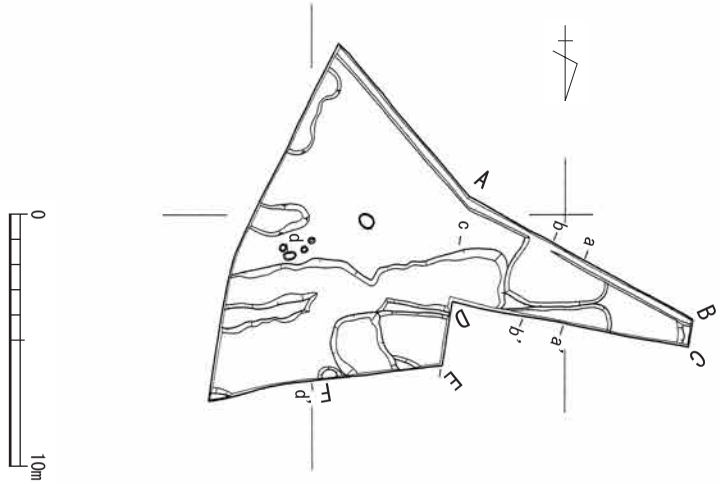


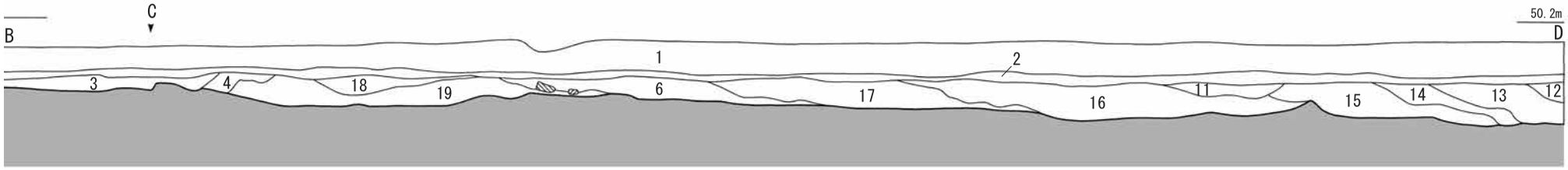


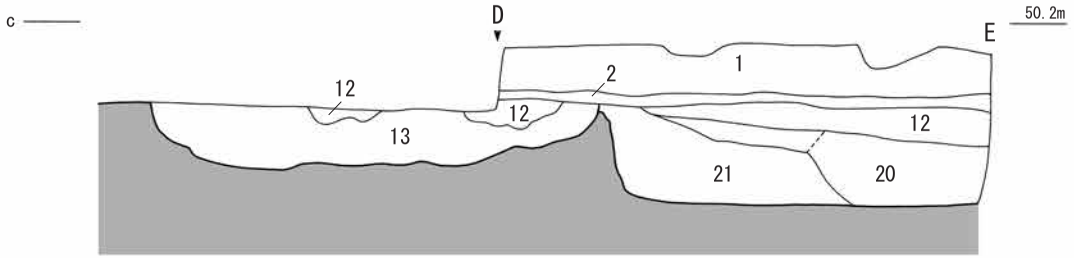


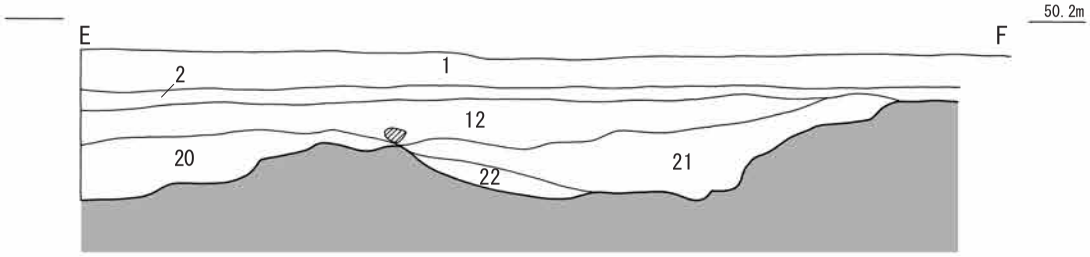


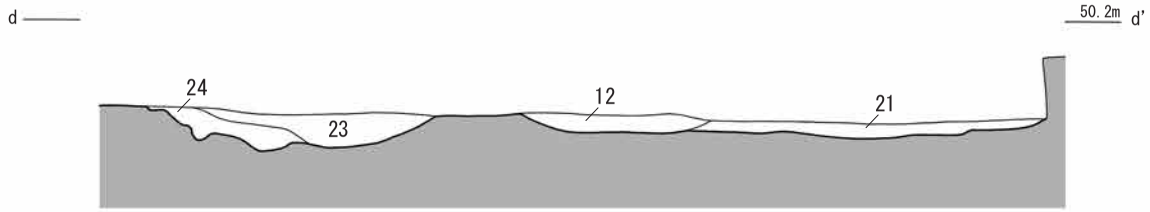
1．耕土
2．床土
3．10YR6/1　褐灰　シルト質細砂　地山ブロック少量混じる
4．7.5YR5/2　灰褐　シルト質細～極細砂
5．10YR7/2　にぶい黄橙　シルト質細砂　6’層が混じる
6．7.5YR4/1　褐灰　シルト質細砂　7.5YR6/1 褐灰シルト質細砂がラミナ状に混じる
6’. 5YR4/1　褐灰　シルト質細砂
10YR6/1　褐灰　シルト質細砂ブロック多く混じる　炭混じる
7．7.5YR3/1　黒褐　シルト質極細砂
8．10YR6/1　褐灰　シルト質細砂
9．7.5YR4/1　褐灰　シルト質細砂　ラミナ状
10. 5YR5/1　褐灰　シルト質細～極細砂



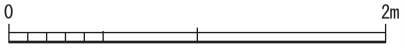








11. 7.5YR5/1　褐灰　シルト質細砂
12. 7.5YR3/1　黒褐　シルト質細砂　５cm以下の礫混じる
13. 10YR6/1　褐灰　シルト質細砂　３cm以下の礫混じる
14. 7.5YR6/1　褐灰　シルト質細砂　15層がラミナ状に混じる（遺物包含層）
15. 7.5YR4/1　褐灰　シルト質細～中砂
16. 10YR6/1　褐灰　シルト質細～極細砂
17. 7.5YR4/1　褐灰　シルト質細砂
　　10YR6/1　褐灰　シルト質細砂がラミナ状に混じる
18. 7.5YR5/2　灰褐　シルト質細～極細砂
19. 7.5YR4/1　褐灰　シルト質細砂
　　7.5YR6/1　褐灰　シルト質細砂がラミナ状に混じる
20. 7.5YR5/1　褐灰　シルト質細砂　南肩付近ラミナ状を呈する
21. 7.5YR5/1　褐灰　シルト質細砂
　　7.5YR7/1　明褐灰　シルト質細砂がブロック状に混じる
22. 7.5YR6/1　褐灰　シルト質細砂
23. N6/　灰　シルト質細砂　12層と地山がブロック状に混じる
24. 10YR6/1　褐灰　シルト質細砂

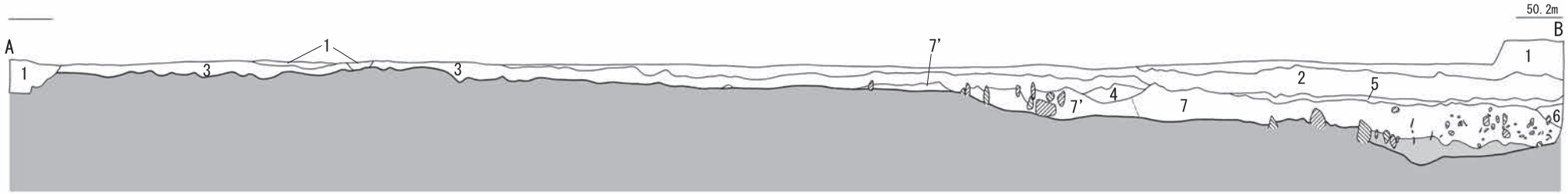


２区遺構（２）

Y=39, 790
D
C'
SD402
C
SH402
4区
SH401
P447
P401
SK405
P426
SK403
SK404
X=-192, 110
P425
SK401
C
B
P405
SK304
SK303
SH303
SK305
3区
SH301
SH302
X=-192, 130
SK306
A
0
10m

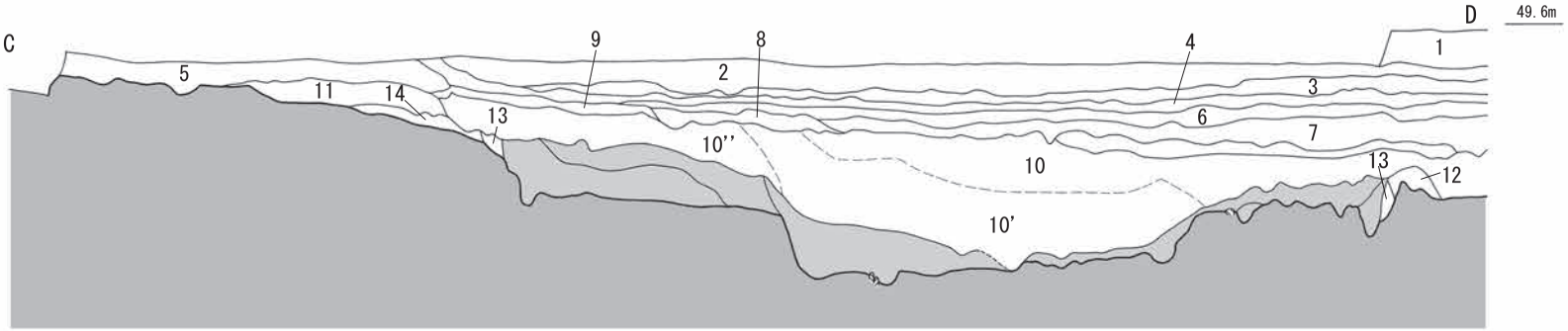
３・４区全体図

3区



1．　耕土
2．　10YR6/1　褐灰　シルト質細砂　５cm以下の礫・地山ブロック混じる　盛土か
3．　10YR6/1　褐灰　シルト質細砂　地山ブロック多く混じる
4．　10YR7/1　灰白　シルト質細砂　地山ブロック混じる
5．　10YR7/1　灰白　シルト質細砂
6．　7.5YR6/1　褐灰　シルト質細砂
7．　5YR2/1　黒褐　シルト質細～極細砂　10 cm以下の礫混じる　土器片多量に包含
7'．　7.5YR6/1　褐灰　シルト質細砂　10 cm以下の礫混じる

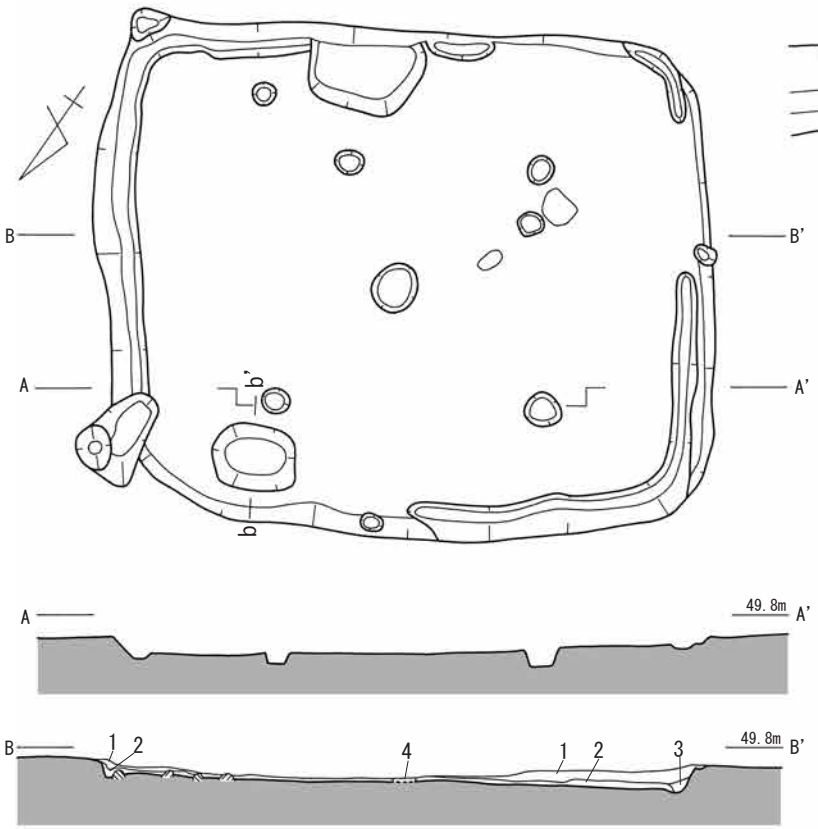
4区



1.　耕土
2.　床土
3.　旧耕土
4.　旧床土
5.　耕土・床土
6.　5YR6/1　褐灰　シルト質細～極細砂
7.　7.5YR6/1　褐灰　シルト質細～極細砂
8.　7.5YR6/1　褐灰　シルト質細砂　細礫多く混じる
9．　7.5YR4/1　褐灰　シルト質細砂
10．　5YR4/1　褐灰　シルト質細～極細砂　遺物包含
10'．　5YR2/1　黒褐　シルト質細～極細砂　３cm以下の礫混じる　遺物包含
10''．　5YR4/1　褐灰　シルト質細～極細砂　５cm以下の礫混じる　遺物包含
11．　5YR5/1　褐灰　シルト質細砂　５cm以下の礫混じる　遺物包含
12．　10YR6/1　褐灰　シルト質細～極細砂
13．　10YR6/2　灰黄褐　シルト質細～極細砂
14．　7.5YR6/2　灰褐　シルト質細砂

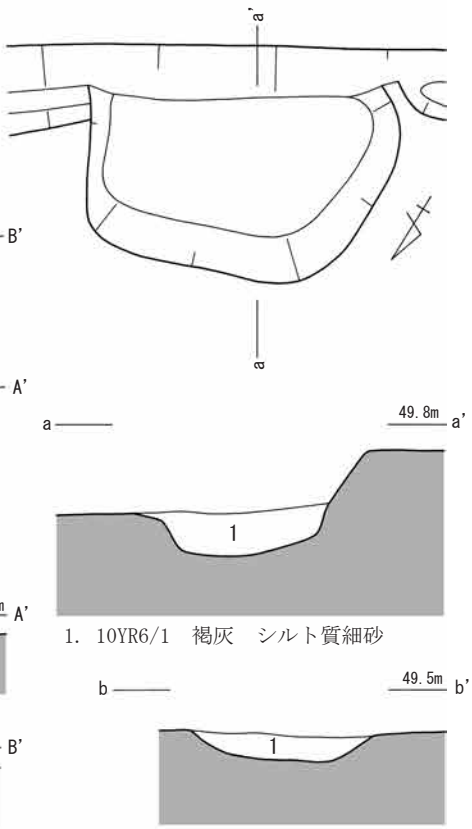
…遺構埋土

SH301



1. 7.5YR5/1　褐灰　シルト質細砂
2. 7.5YR6/1　褐灰　シルト質細砂
3. 10YR6/2　灰黄褐　シルト質細砂
4. 7.5YR4/1　褐灰　シルト質細砂

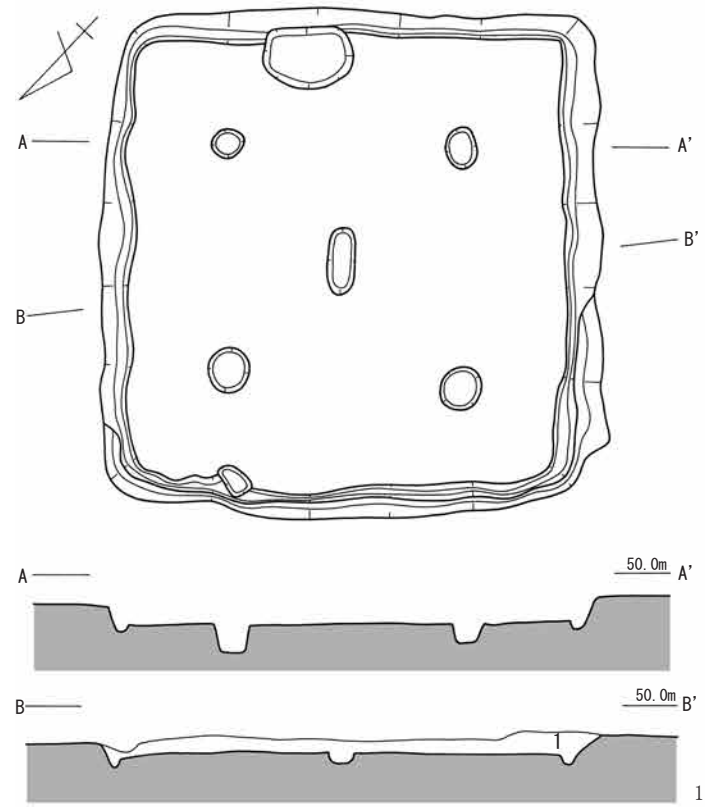
壁際土坑



1. 10YR6/1　褐灰　シルト質細砂

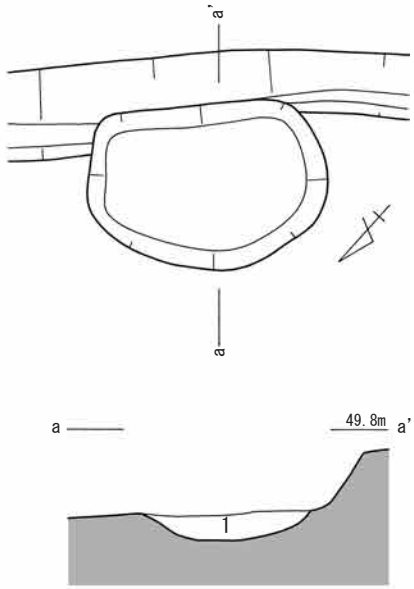
1. 7.5YR5/1　褐灰　シルト質細砂

SH302



1. 7.5YR6/1　褐灰　シルト質細砂

壁際土坑

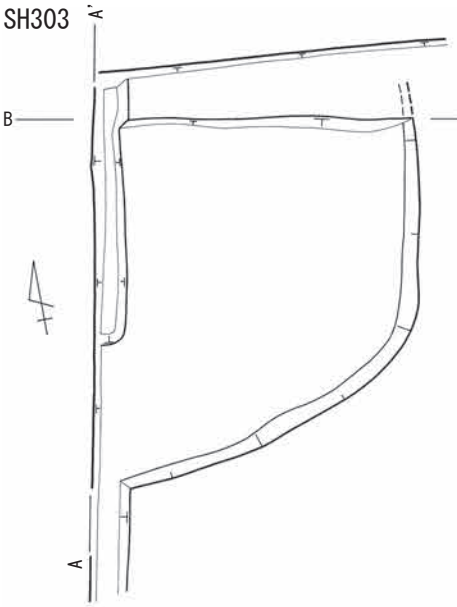


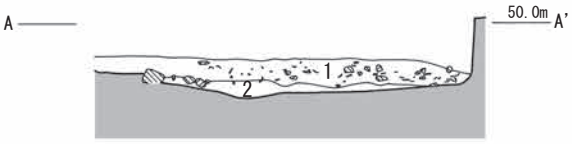
1. 5YR5/1　褐灰　シルト質細砂

0　4m　　0　1m

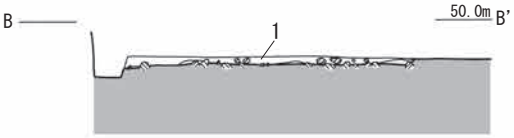
３・４区遺構（１）

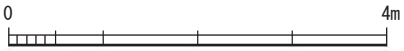
SH303



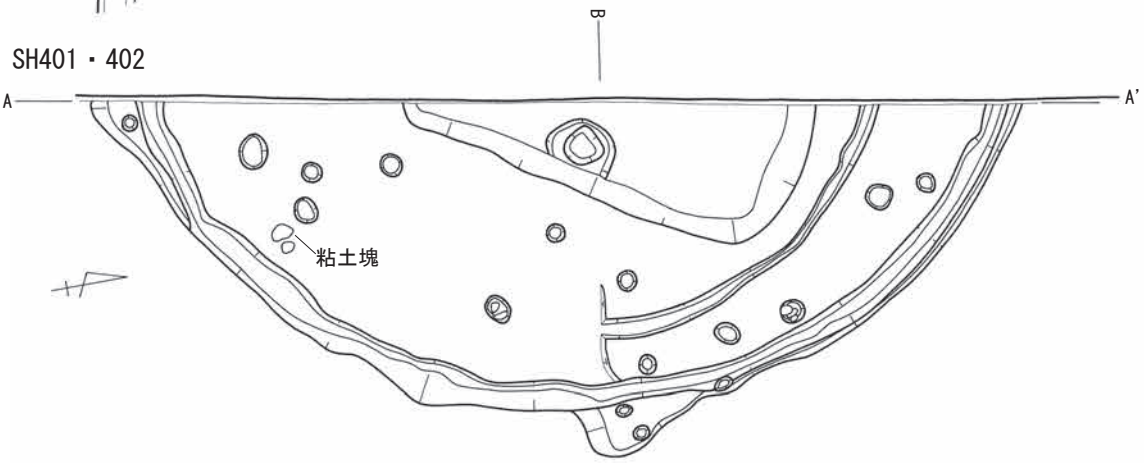


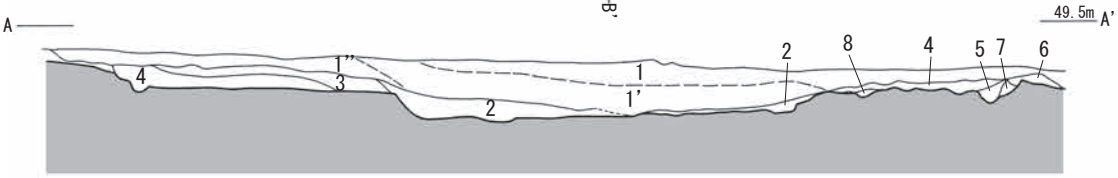
1. 5YR2/1　黒褐　シルト質細～極細砂　15 cm以下の礫が混じる　遺物包含
2. 5RY5/1　赤灰　シルト質細砂　10 cm以下の礫が混じる

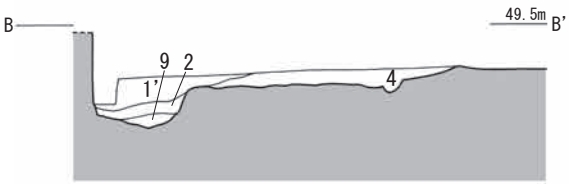




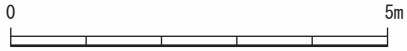
SH401・402



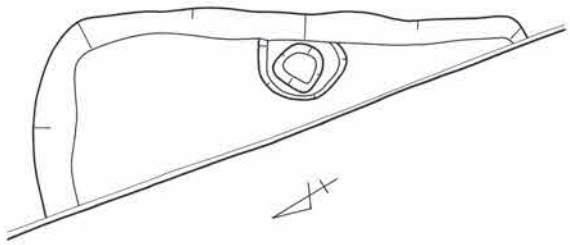




1 .	5YR4/1	褐灰	シルト質細～極細砂　遺物包含
1'.	5YR2/1	黒褐	シルト質細～極細砂　３cm以下の礫混じる　遺物包含
1''.	5YR4/1	褐灰	シルト質細～極細砂　５cm以下の礫混じる　遺物包含
2 .	5YR6/2	灰褐	シルト質細砂
3 .	10YR5/1	褐灰	シルト質細砂　土器包含
4 .	2.5YR5/2	灰褐	シルト質細砂
5 .	7.5YR6/2	灰褐	シルト質細砂
6 .	10YR6/1	褐灰	シルト質細～極細砂
7 .	10YR6/2	灰黄褐	シルト質細～極細砂
8 .	10YR7/3	にぶい黄橙	シルト質細～極細砂
9 .	5YR6/1	褐灰	シルト質細砂　土器・炭粒混じる

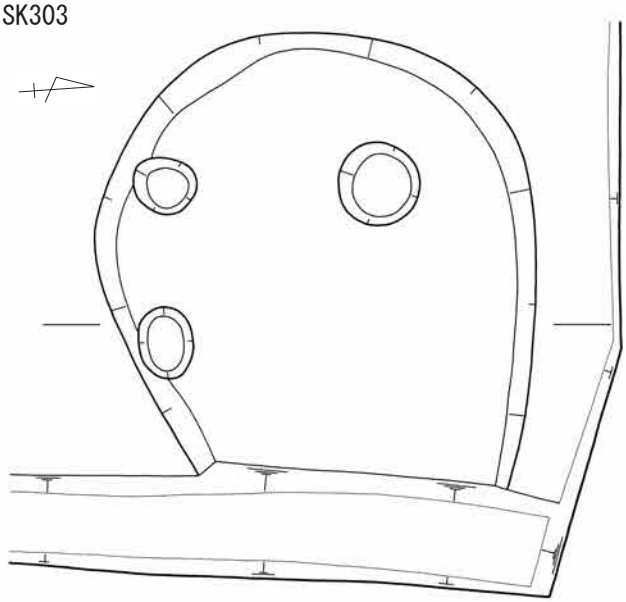


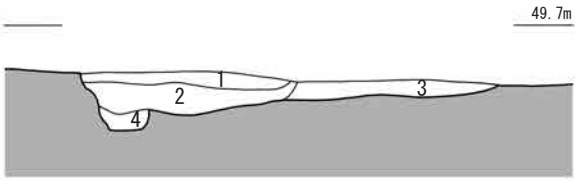
SH402



３・４区遺構（２）

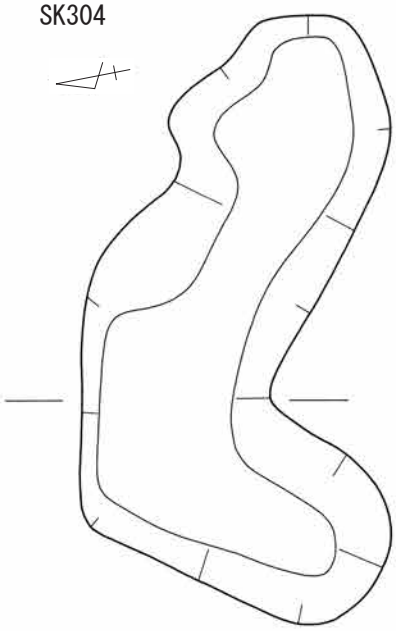
SK303

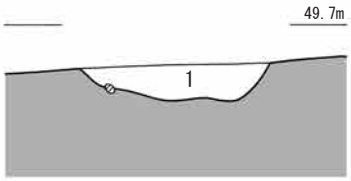




1. 5YR4/3　にぶい赤褐　砂礫　遺物包含
2. 7.5YR7/1　明褐灰　シルト質細砂
3. 7.5YR6/1　褐灰　シルト質細砂　砂礫混じる
4. 7.5YR3/1　黒褐　シルト質細砂

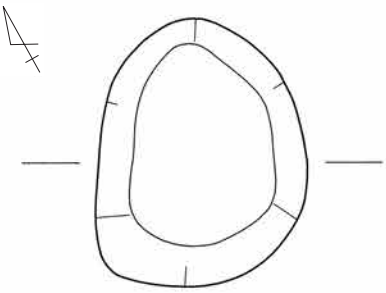
SK304

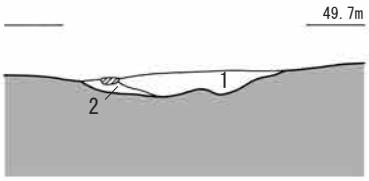




1. 7.5YR7/1　明褐　シルト質細砂

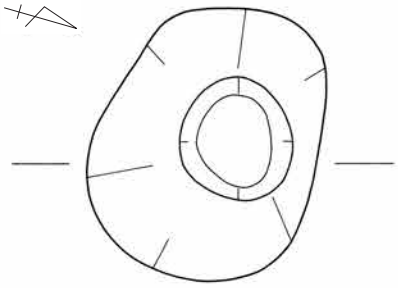
SK305

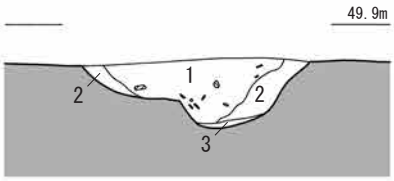




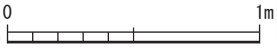
1. 7.5YR7/1　明褐灰　細砂
2. 7.5YR7/1　明褐灰　細砂

SK306

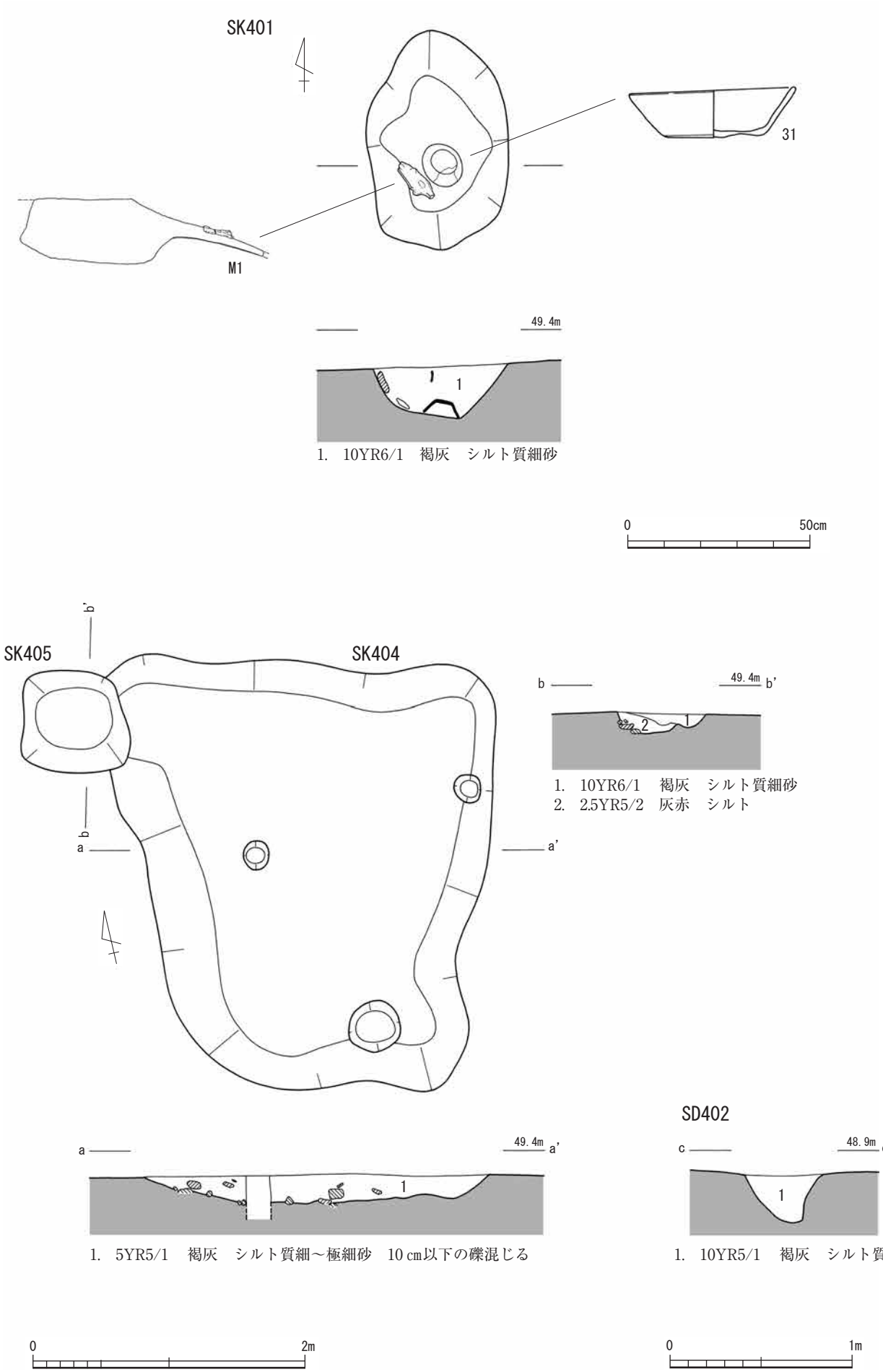




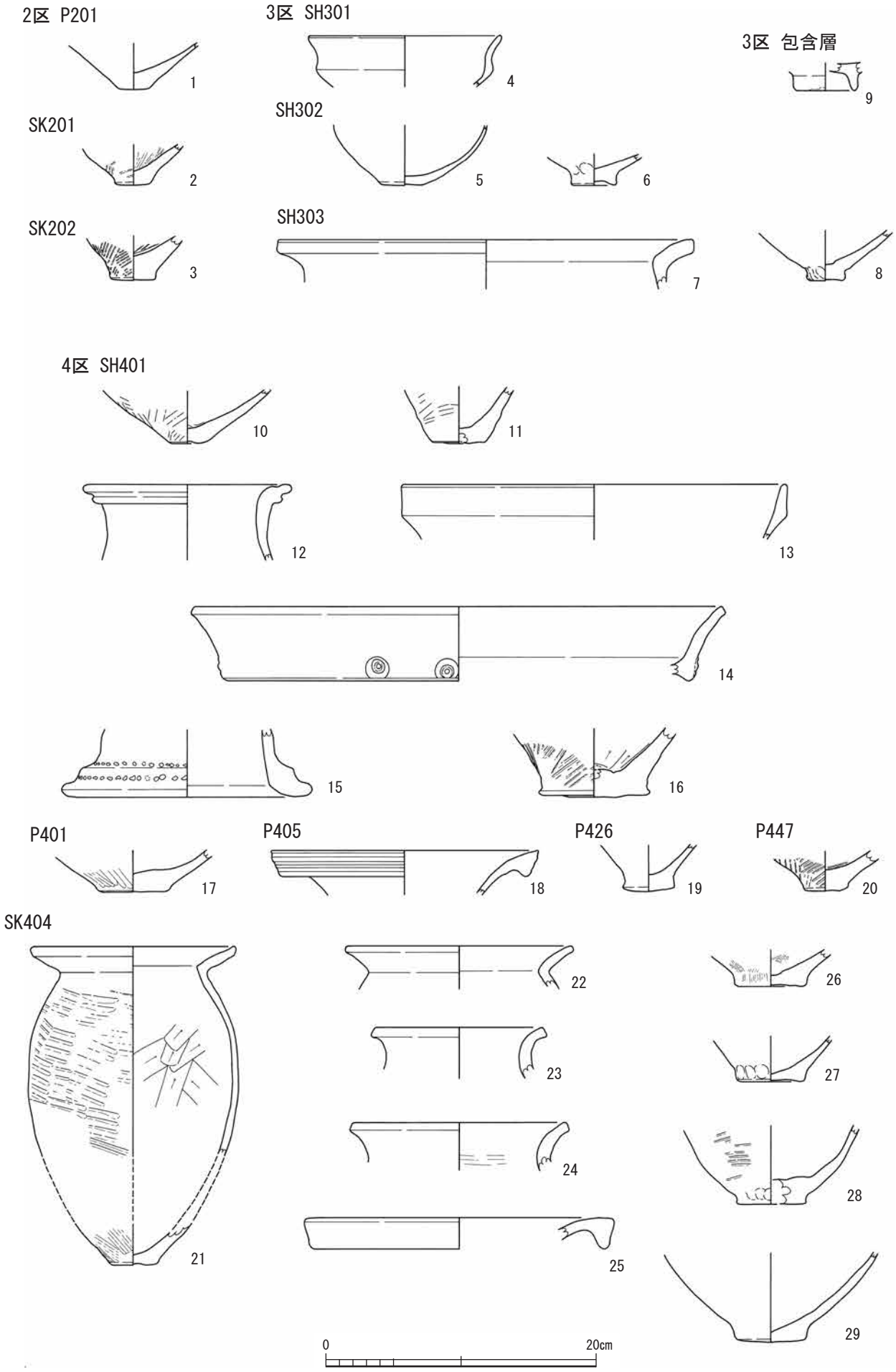
1. 7.5YR4/1　褐灰　細砂
2. 7.5YR6/1　褐灰　細砂
3. 10YR7/4　にぶい黄橙　細砂



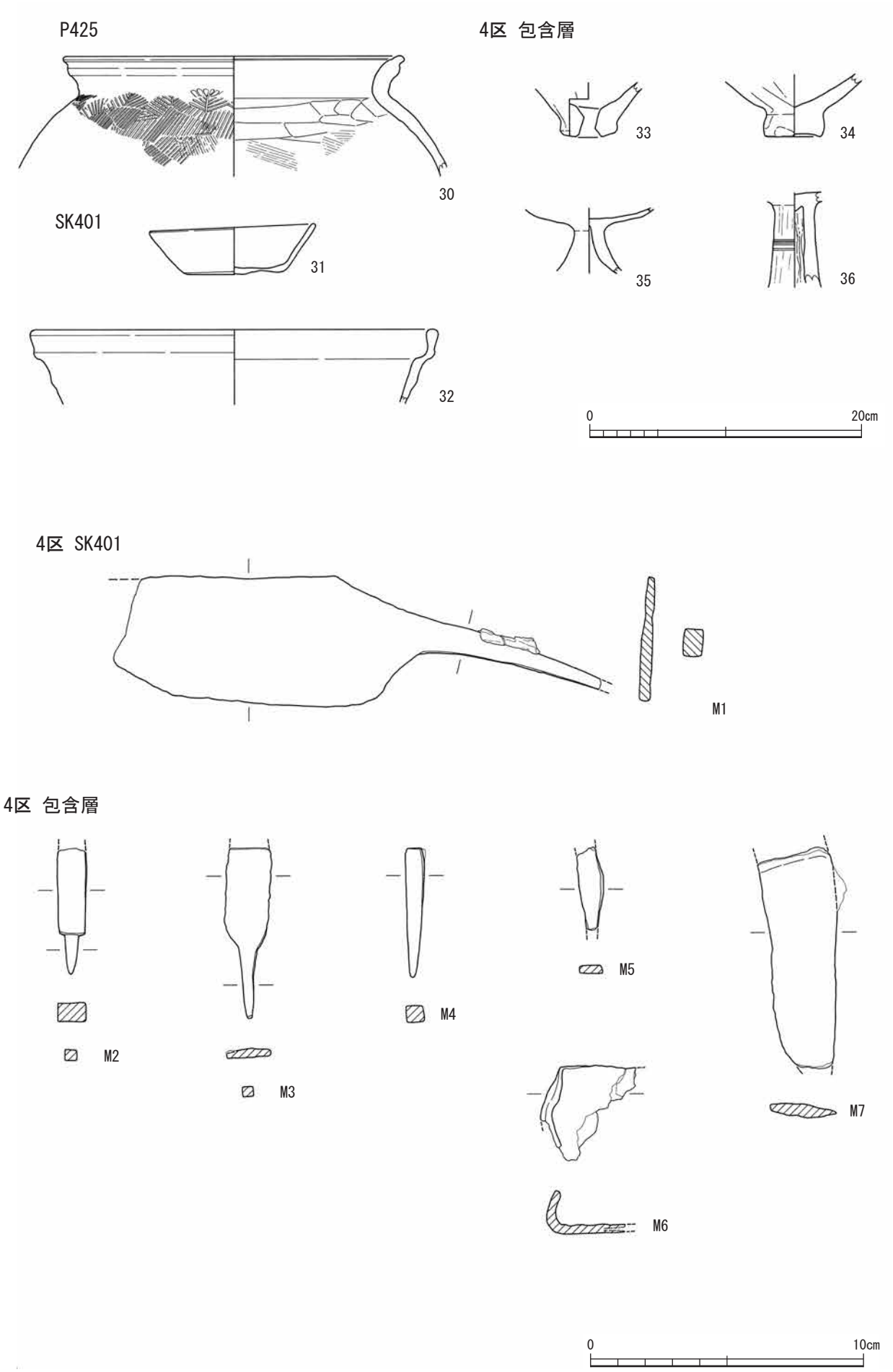
３・４区遺構（３）


SK401
31
M1
49.4m
1
1. 10YR6/1 褐灰 シルト質細砂
0
50cm
SK405
SK404
b'
b
a
a'
49.4m
2
1. 10YR6/1 褐灰 シルト質細砂
2. 2.5YR5/2 灰赤 シルト
SD402
48.9m
c
c'
1. 5YR5/1 褐灰 シルト質細～極細砂 10㎝以下の礫混じる
1. 10YR5/1 褐灰 シルト質極細砂
0
2m
1m

３・４区遺構（４）


2区 P201
1
SK201
2
SK202
3
3区 SH301
4
SH302
5
6
SH303
7
3区 包含層
9
8
4区 SH401
10
11
12
13
14
15
16
P401
17
P405
18
P426
19
P447
20
SK404
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
20cm

出土遺物（1）


P425
30
SK401
31
32
4区 包含層
33
34
35
36
0
20cm
4区 SK401
M1
4区 包含層
M2
M3
M4
M5
M6
M7
0
10cm

出土遺物（2）

写真図版

調査区付近航空写真（1974年国土地理院撮影）

三原平野と遺跡（西から）

遺跡遠景（西から）
奥は諭鶴羽山地

遺跡遠景（東から）
奥右上は播磨灘

遺跡遠景（北から）
奥は太平洋から鳴門海峡

調査対象地遠景（北西から）

調査区調査前の状況（北から）

調査区遠景(1)（東から）

調査区遠景(2)（西から）

調査区と周辺の地形（垂直写真）

調査区全景(1)（垂直写真）

調査区全景(2)（南から）

調査区全景(3)（北から）

１区と周辺の地形
（南東から）

１区
全景（東から）

１区
SD101（東から）

２区
全景(1)（西から）

２区
全景(2)（南から）

２区
SK201 ～ 203
（南から）

２区
SK201・SD201
（西から）

２区
SK201・SD201
断面（東から）

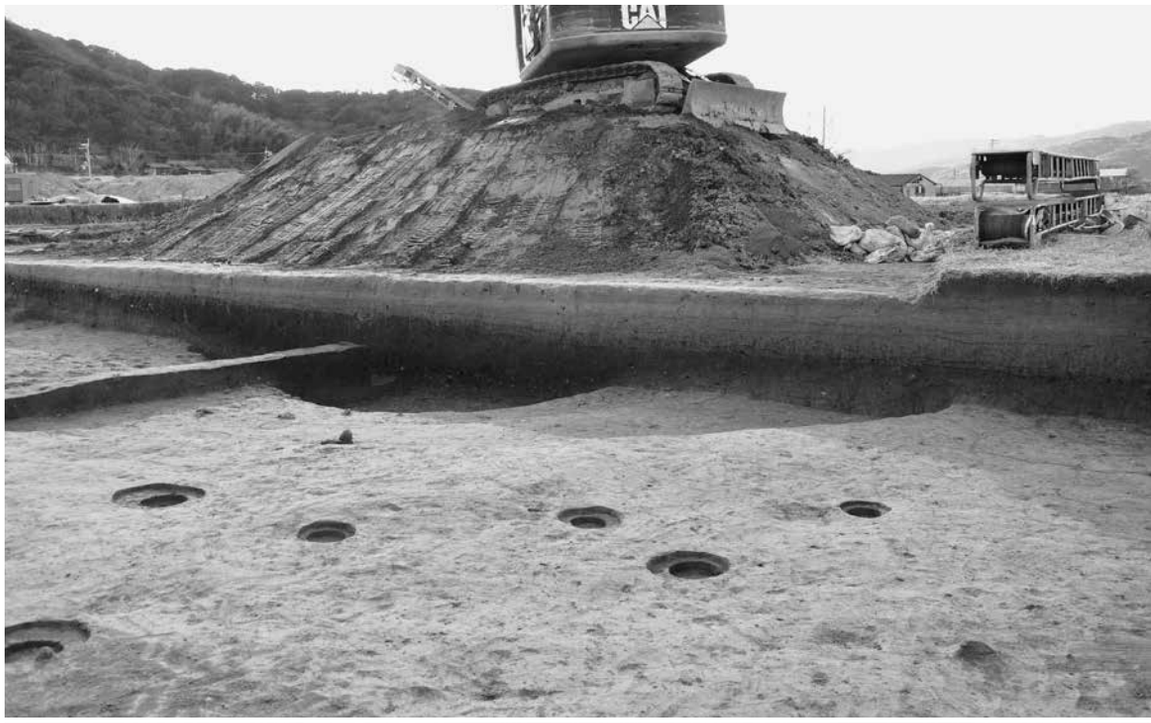
２区
SK202・203
（西から）

３・４区
全景⑴（南から）

３・４区
全景⑵（北から）

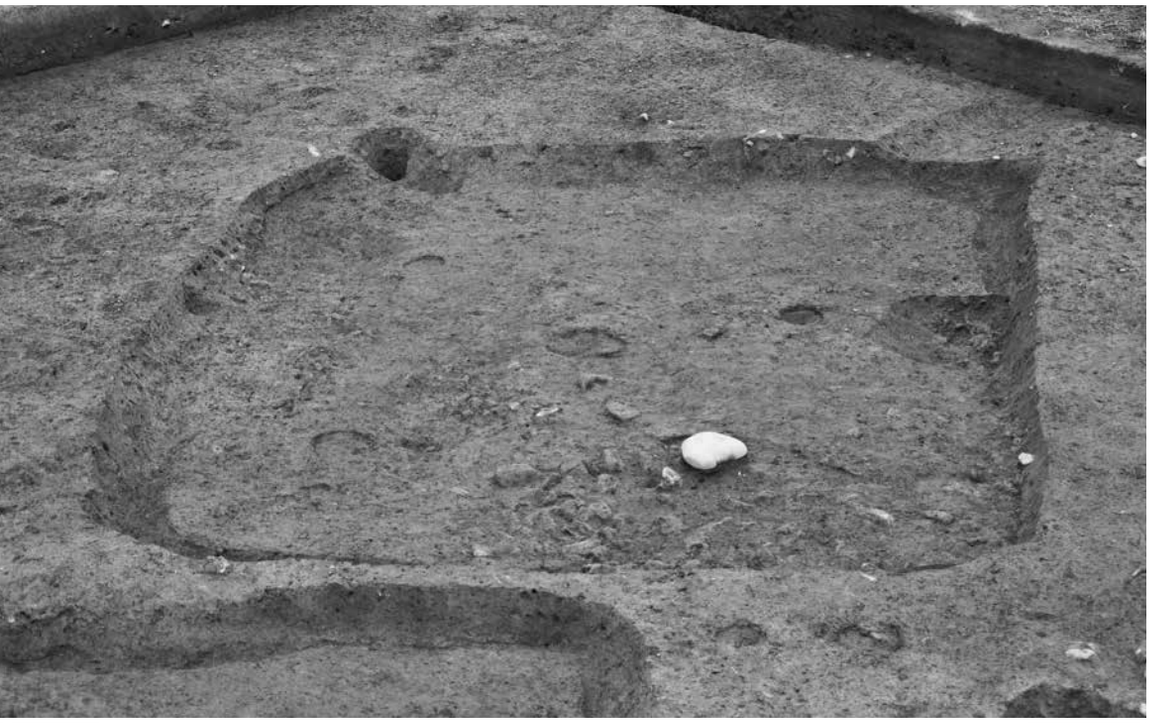
３区
南半部西壁断面
（北東から）

３区
北半部西壁断面
（南東から）



４区
西壁断面
（北東から）

３区
ＳＨ 301・302
（南西から）



３区
SH301
（南西から）

３区
SH301 断面
（南東から）

３区
SH301
壁際土坑断面
（南西から）

３区
SH301
屋内土坑断面
（西から）

３区
SH302
（南西から）

３区
SH302 断面
（南東から）

３区
SH302
壁際土坑断面
（南西から）

３区
SH303（南から）

３区
SH303 断面
（東から）

4区
SH401・402
（東から）

4区
SH401・402
南北断面
（南東から）

4区
SH401・402
東西断面
（南から）

４区
SH401
床面検出粘土塊
（南から）

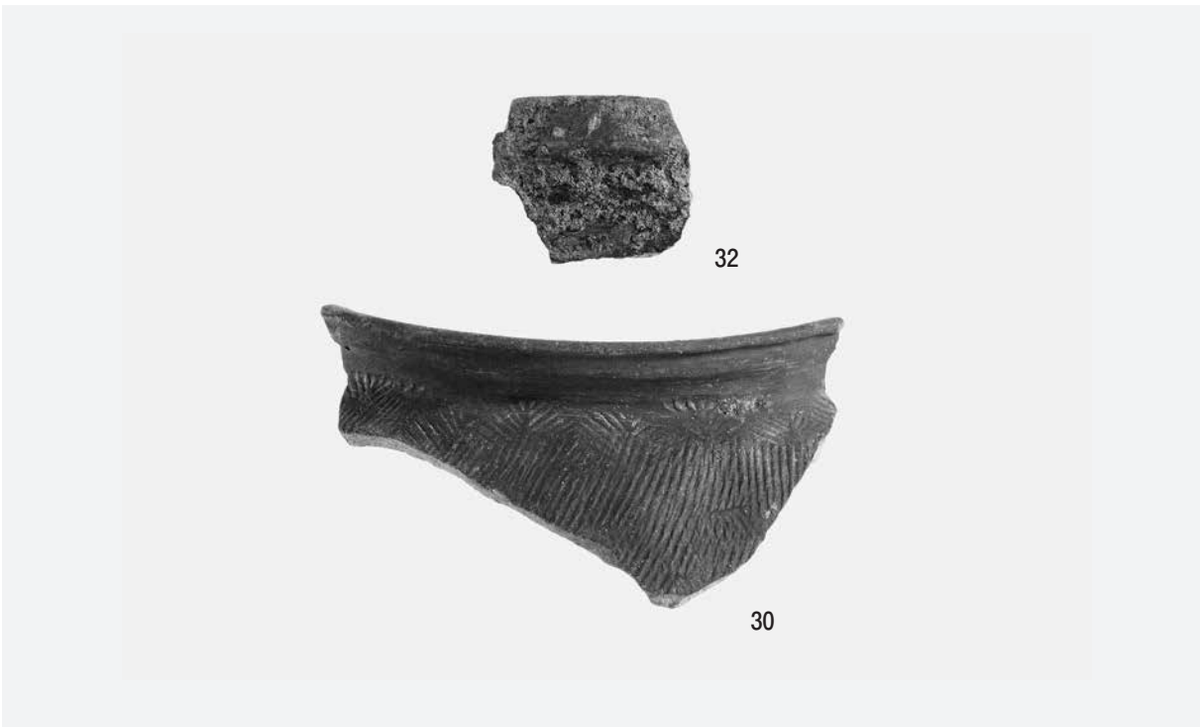
４区
SH402
（南東から）

４区
SH402
壁際土坑断面
（南西から）

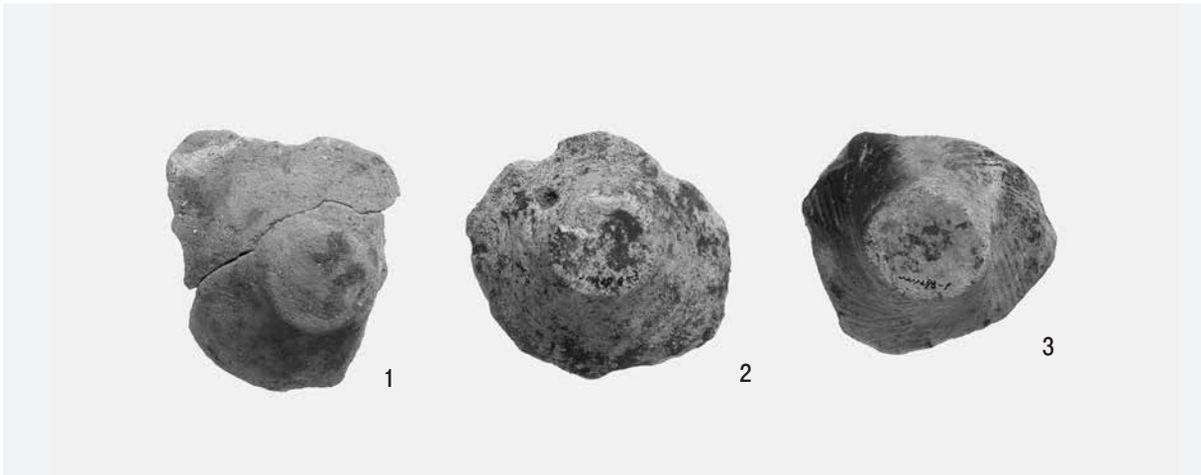
４区
SK401
（東から）

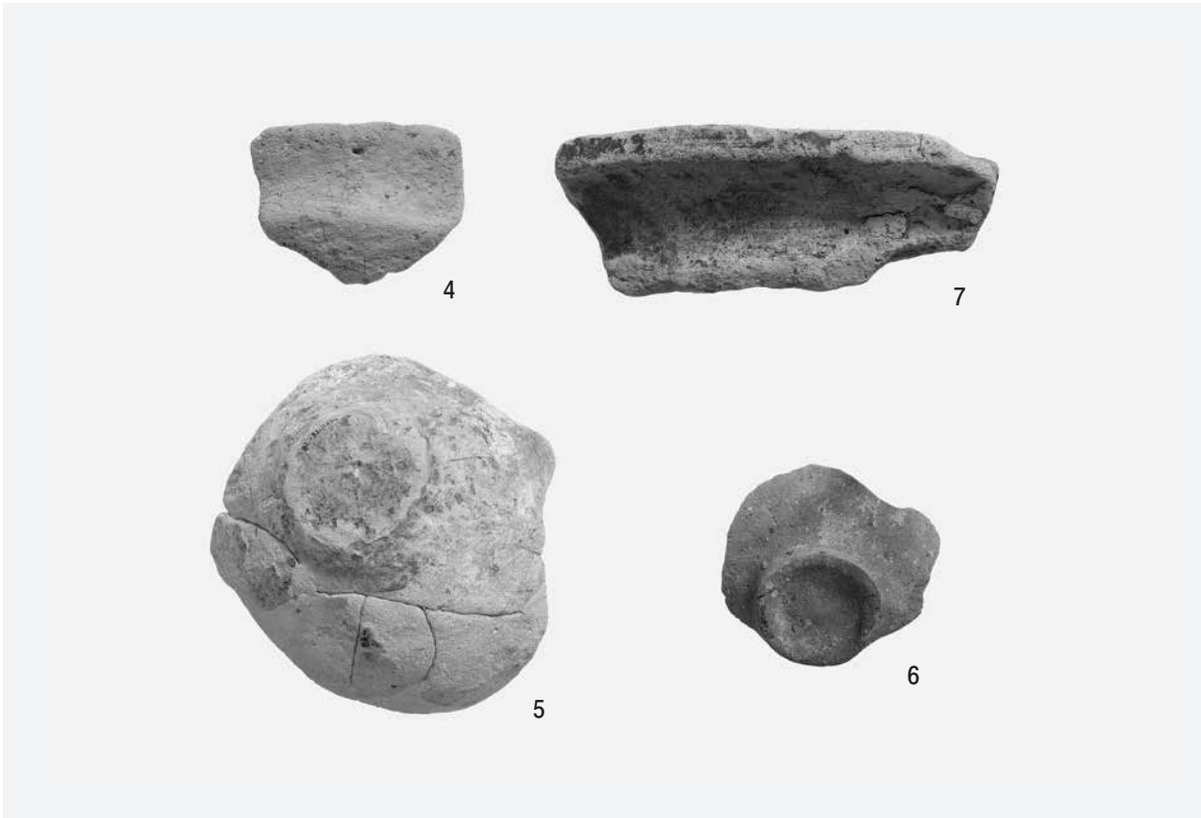
４区
SK404 断面
（南から）

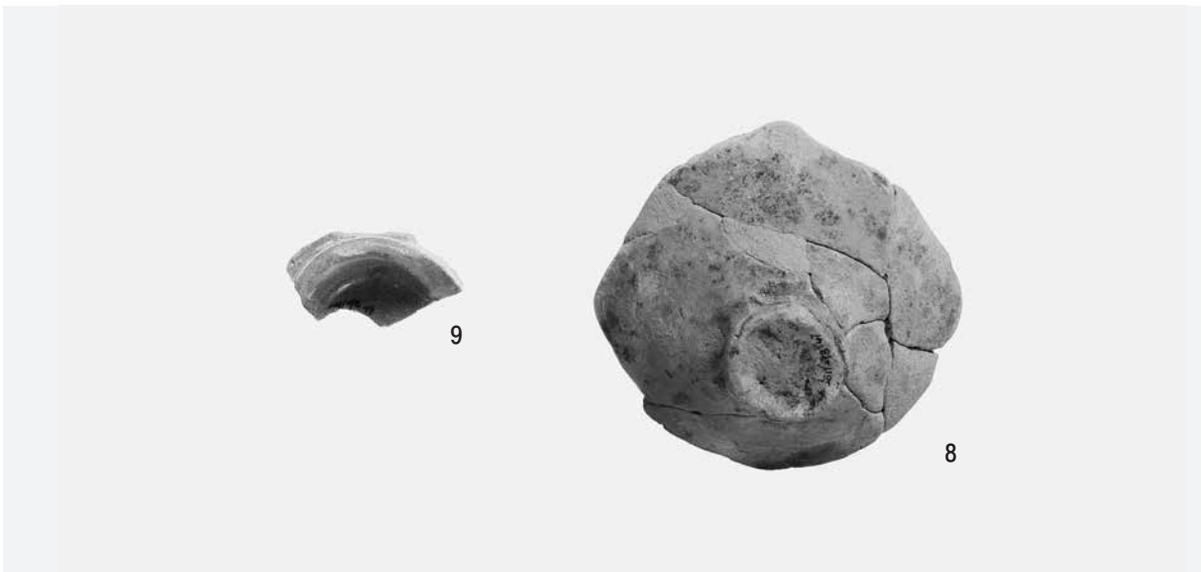
４区
SK405 断面
（東から）



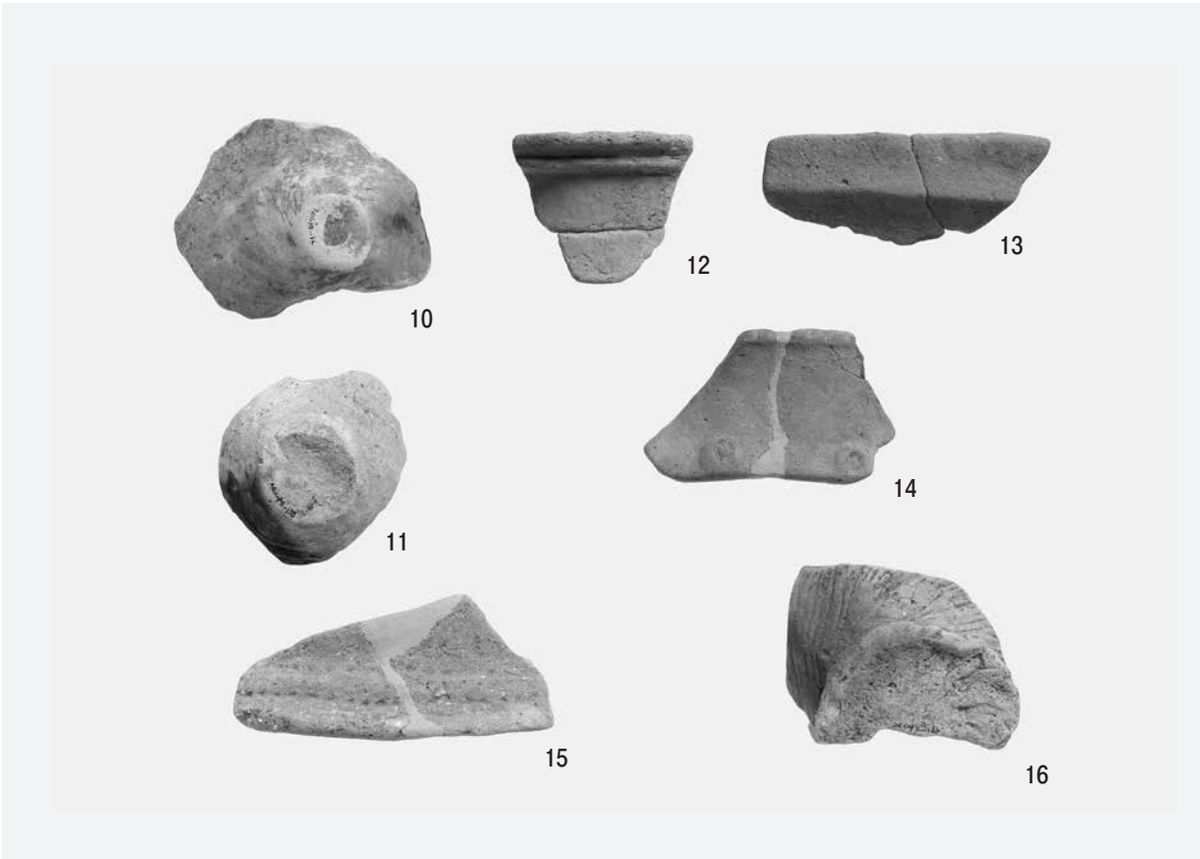
出土遺物（1）

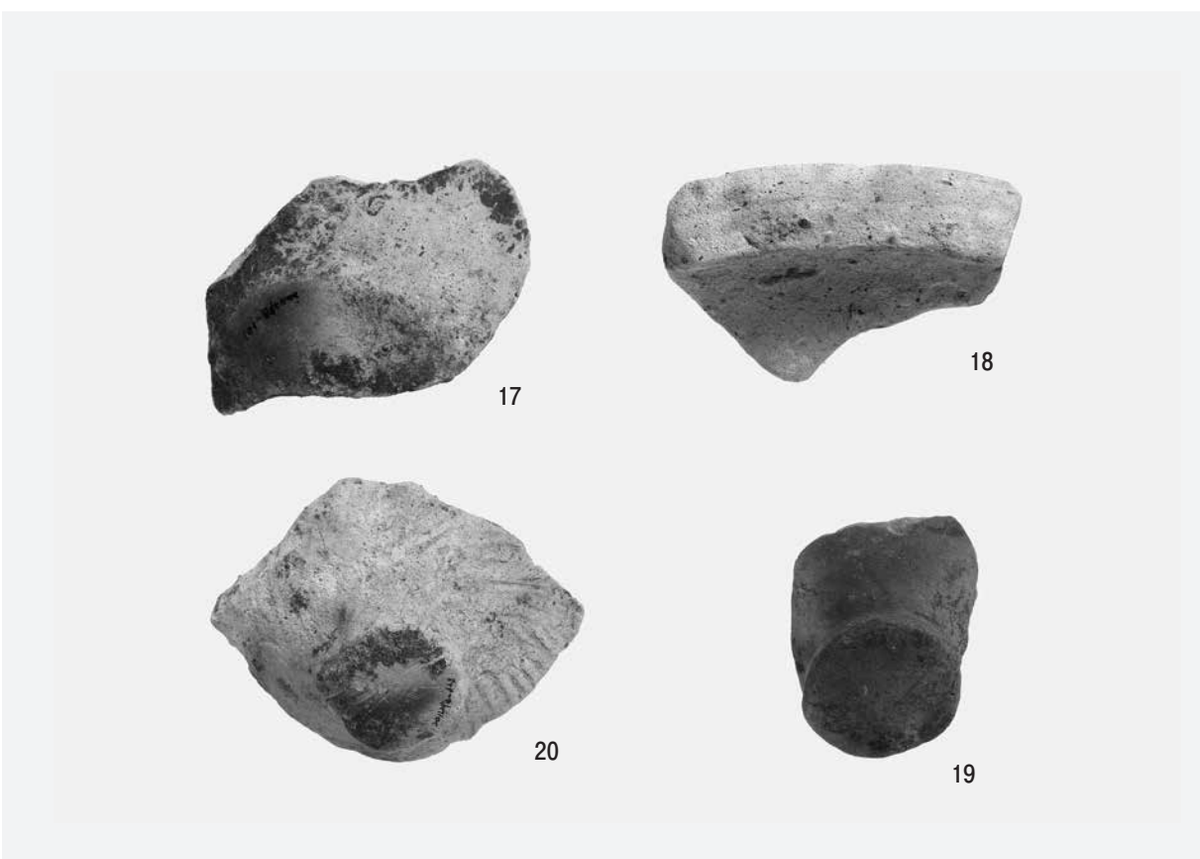




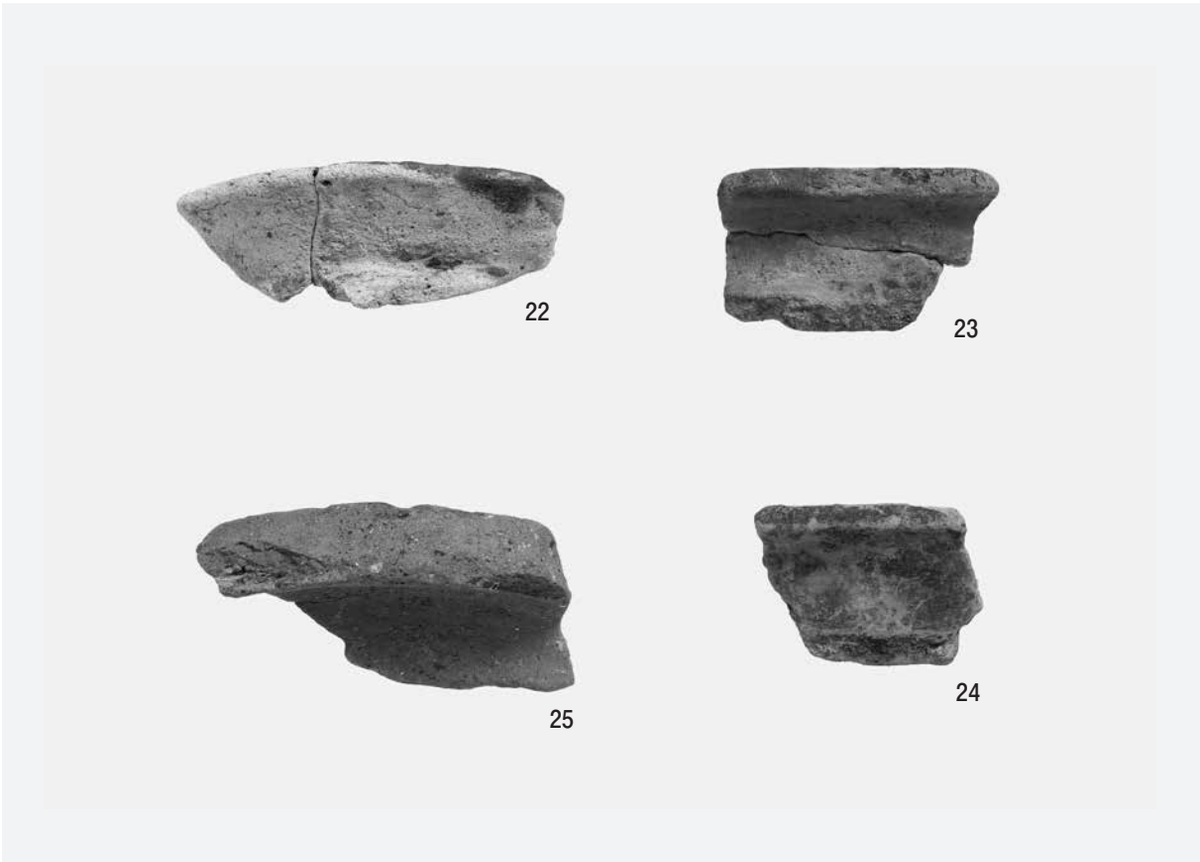


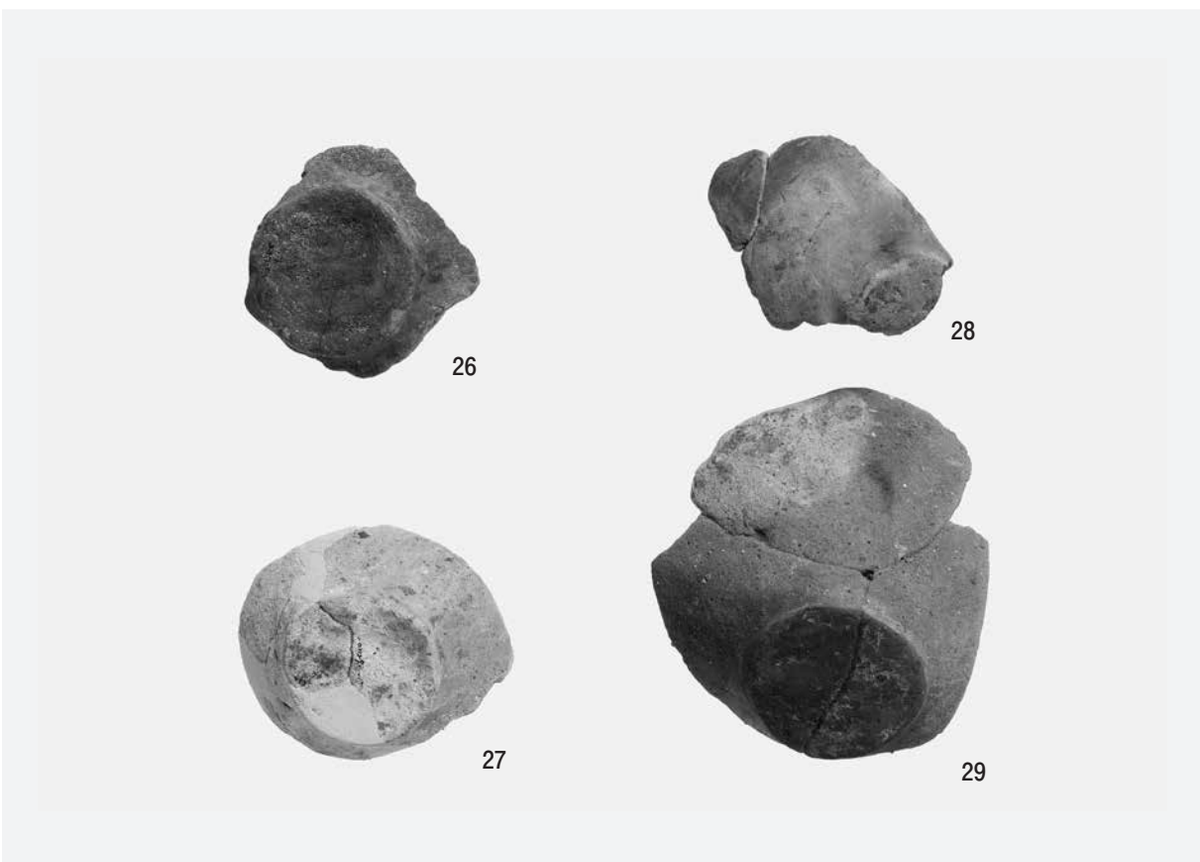
出土遺物（2）



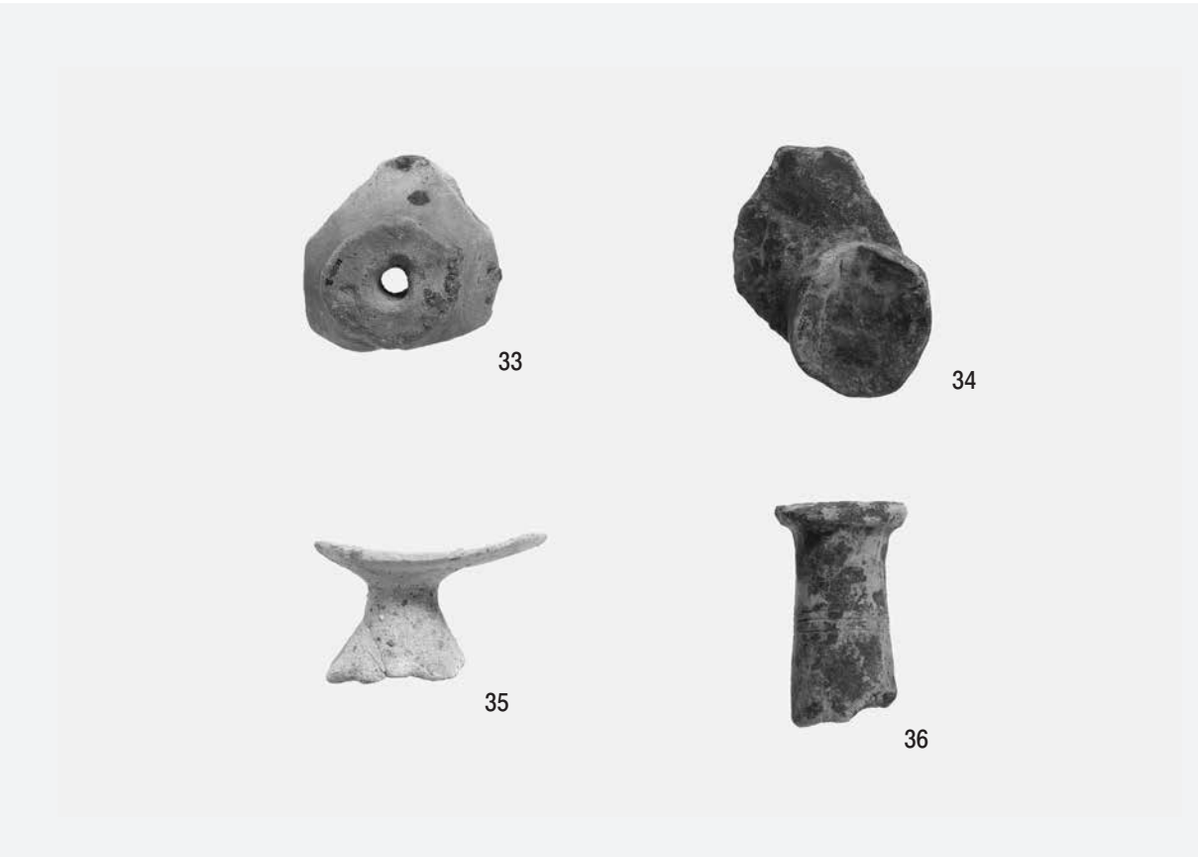


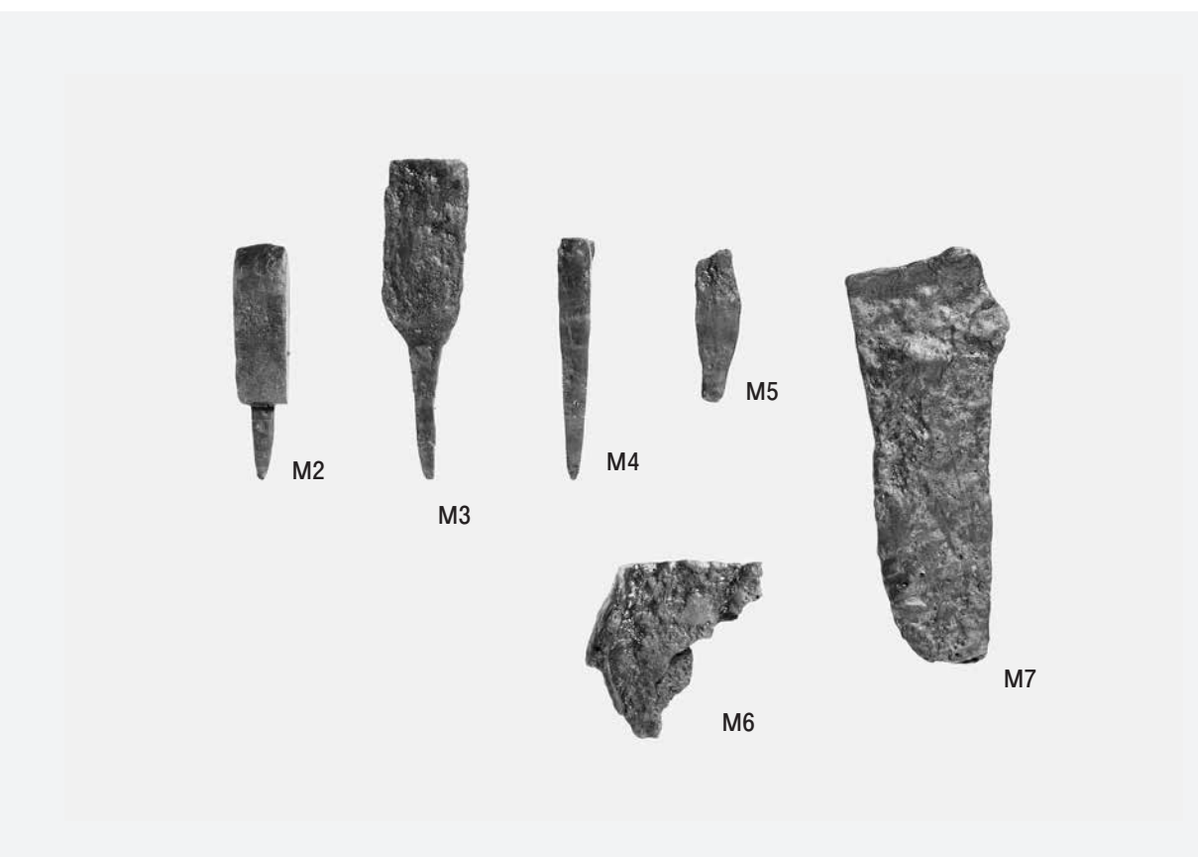
出土遺物（3）





出土遺物（4）





出土遺物（５）

兵庫県文化財調査報告　第469冊
南あわじ市

鐘　原　遺　跡

－広域営農団地農道整備事業　南淡路地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成26年（2014）3月31日　発行

編集　公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号
（兵庫県立考古博物館内）
発行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印刷　菱三印刷株式会社
〒652-0803　兵庫県神戸市兵庫区大開通２丁目2-11